
恋姫物語

ポーズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫物語

【Nコード】

N2175M

【作者名】

ボーズ

【あらすじ】

記憶を失い、失った記憶を取り戻すために恋姫の人たちと仲良くなりながら旅をしたりいろいろしたりで自己満ワールド全開で書いていきます。

オリキャラがでできます。何か原作無視しそうなんで嫌な人は回れ右してください！

ブローグ

「僕は大きくなったら大陸で一番の武人になるんだ！」

そう叫んでいるのは5歳位の男の子。

「ならまず、私に勝ってから言いなさいよ！」

男の子にそう言っているのは5歳位の女の子。

二人はいつも一緒に行動し、互いに競い合いながら成長していた。

「今はまだ勝てないけどいつか絶対に勝ってみせるもん。」

男の子は泣きながら女の子に言っていた。

「泣きながら言われても恐くともないよーだ！」

女の子は笑いながら男の子に言っていた。

男の子は決心したかのように女の子にこう言った。

「愛ちゃんには絶対に負けないからね！」

プロローグ（後書き）

テンションのみで書いたが後悔はしていないよ？

1 話（前書き）

がんばりまっる

1話

「またこの夢か……。」

ここ最近頻繁に見る夢。今の俺には全く覚えのない出来事。

「『愛』っていったい誰なんだ？」

俺は夢に出てきている『愛』という人物が気になってしょうがない。

あの子はいつたい俺とどんな関係だったんだ？

この夢は俺の問題と関係が有るのか？有るからこんな夢を見ているんだろうが……

考え出したらきりがない位の疑問が俺の頭を駆け抜けていく。

「まあ、いつか解るだろ！もうひと眠りしたいが目が冴えて寝れないな……」

よし！いつもより早い朝練でもするかな。」

俺は、寝台から身体を起こし、日課となっている朝練を
しに外へ向かった。

「ハア・・・ハア・・・」

日課になっている朝練が今日はいつも以上にはかどる。

こういう時は、決まって良くない事が起きている。

「今日は一体どんな厄介事が舞い込んで来るんだ？」

俺は、呟きながら今までの厄介事を思い出していた。

1 話（後書き）

思いつかない・・・文才が欲しい・・・

話が短すぎる・・・

2話（前書き）

よろしく願います！

2話

〈回想〉

ひと月前・・・

俺は、母上が頼まれたこの村の周辺を治める太守の護衛に付いて行った。

母上は昔、かなり腕の立つ猛将だったらしい。昔勤めていた城の将だったが、

その太守がかなり最低な奴らしく、それが嫌で将を辞めてこの村まで流れてきたらしい。

俺？もちろん断ったさ！いくら鍛錬しててもまだ自分の身を守る為だけの武術しか持っていない、

護衛の為の武術は、まだまだだと思っていた。正直不安だ。しかし、母上は、

「あなたの武術はもう、人を守る位にはなっているはず。だから大丈夫。」

いざとなったら私が守ってあげるから。」

と言っていたが本当はなんだろう？

「母上。本音はいつたい何ですか？」

俺は聞いた。しかし母上は・・・

「だって一人だと退屈でしょ？護衛の兵がいても頭が固すぎるし、一人で歩くより

お話しながらの方が退屈しないでしょ？」

つまり母上は、俺を退屈しのぎの道具として付いてこさせたのか・・・

「なら母上は、俺に暇だから付いて来いと言っている訳ですわね・・・」

俺は嫌味っぽく言ってみた。そんな理由で俺は命の危機に

遭遇するのか・・・

「嘘よ。退屈つてのもあるけど本当はそろそろ護衛とかの経験をさせておきたい

からよ。もちろん危険な時は助けるから大丈夫よ。」

母上は、笑顔で答えてくれた。すると俺の中の不安はいつきに解消した。

母上はこんな事を思つて俺をこの護衛に連れて行つてくれたのか。

俺は、かなりの自信とやる気に燃えていた。だが俺のやる気とは裏腹に、

何かが襲つて来る事もなく無事に太守を送る事が出来た。

しかし、その帰り道。俺と母上は、二人で村まで帰路に ついていたが、どうも

母上の様子がおかしい・・・何か真剣な顔で辺りを警戒している。

いったい何があったのか聞こうとすると。

母上はいきなり走り出し、訳の解らない俺はその場で立ち尽くしていた。

すると突然、目の前には家ほどはある熊が俺の襲ってきた。その時母上が、

「その熊はまかしたわよー！私、熊は苦手だからー！」

と聞こえてきた。そんな声を聞き流しつつ、俺は必死に逃げた。

俺が村に着いた時は、真上にあつた日の光が見えない位になった時だった・・・

その他にも猪に追いかけられたり、またあの熊に出会ったりなどしていた。

2話（後書き）

適当になってしまいました・・・

3話（前書き）

まさかの連続投稿？

3話

やっぱり朝練がはかどる時はろくな事が無い・・・

今日はいつたい何があるんだ？何か今日はかなり危険な感じがするし・・・

「兄上。朝練をするのはいいが、そんな格好では役人に捕まってしまうぞ。」

んゝいったい何なんだ？何か聞こえて来るし・・・んゝ？

「兄上！・・・聞いておりますか？」

ん？痛だっ！？何者かによって俺は現実に引き戻されると同時に、首を思いっきり捻られました。

「何だ。星じゃないか！こんなに朝早くどうした？一緒に朝練するか？」

どうやら星が俺と朝練したくて起きてきたようだ。よし相手

になるか！

「兄上・・・朝練ではないであろうに・・・もうすぐ昼ですぞ？」

今、星は何と言った？昼だと？俺はいつたいどれほどの時間鍛錬していたんだ？

「鍛錬よりも考えている時間の方が長かったと思いますが？」

そうなのか？かなり無駄な時間を過ごしたな・・・

「そろそろ昼なら飯でも食べるか！星、行くぞ！」

俺は、星と一緒に昼飯を食べに家の中に入って行った。

家の中はすでに昼食の良い匂いがしていた。ちょうど腹も空いているしな！

「母上、父上。兄上を連れてまいりました。外に裸でいる所を捕まえました。」

星がなにか言っているが気にしないでおう・・・

「おっ来たか！早く食べるぞ！」

父上が食の号令をかけ、昼食（朝飯）を食べ始めた我が家族。

「そういえば、お前が我が家に来て5年も経つのか・・・早いものだ。」

最初は星に嫌われていたのに今となつてはこんなに懐いて・・・

「いったい何があつたんだろうな。」

「そういえば、父上の言う通りここに来てもう5年か・・・」

「そういえばここに来た頃は星にやたらと嫌われていたな。まあ今となつては良い思い出だ。」

「あの頃のお前もかなりの問題を抱えておつたな、まあ今もその問題は解決してないがな。」

父上の言うとおり、俺の重大な問題も解決しないまま5年経ってるしな・・・

そろそろ、どうにかしないとな・・・それにしても5年前は大変だったな・・・

3話（後書き）

星ちゃん登場！

それにしても口調が良く解らない・・・

4 話（前書き）

よろしくです

4話

5年前

「うつ……」

目を覚ました時、見えて来たのは、どこかの天井。どうやら寝ていたらしい。

「気がついたかい？」

声をかけられた方に目を向けると、知らないおじさんが僕の顔を覗きこんでいた。

「あの……ここはどこですか？」

僕は今、自分がどこに居るのか解らないため、おじさんに聞いてみた。

「ここは私の家だよ。君がここから少し離れた川で倒れている

のを見つけて、ここまで

運んで寝かしていたんだよ。いったい何があったんだい？」

おじさんは優しく答えてくれた。僕は、川で倒れていた所をおじさんが助けてくれたらしい。

えっ・・・！？僕は何故、川で倒れていたのだろう・・・？

何故おじさんに助けてもらっているの？

なにより

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

僕はいつたい誰なんだ？・・・何も思い出せない・・・

全く思い出せない・・・さっきまで見ていた夢より前の出

来事は

何ひとつも覚えていない。僕は誰で、何故ここに居るのか？

何故川で倒れていたのか？考えるほど頭が痛くなる・・・

まるで頭が何も思い出すなど言っているかのように考える
ほど痛くなる。

「ハア・・・ハア・・・」

それと同時に呼吸も荒くなっていく。

「君！だ・・・じょ・・・ぶか？」

おじさんが何か言っているようだが何も聞こえない・・・

そして僕の意識は闇に吞まれていった・・・

「気がついたかい？」

僕を助けてくれたおじさんが心配そうに見つめていた。

どうやらまた気を失っていたらしい・・・

「さつきはかなり苦しそうだったけど大丈夫かな？無理に話をしなくていいからね。」

おじさんの目は本当にやさしい。少しだけ気持ちが落ち着いて気がした。

今なら話せそうな気がする。

「おじさん。僕を川で助けたって言うてましたけど、僕はそれまでの事を、

全く覚えていないんです・・・自分の名前も・・・夢を見たことしか覚えてなくて・・・」

僕は、全てを話した。

「それはどんな夢なんだい？」

おじさんが聞いてきたので答える事にした。

4 話（後書き）

ぐたぐた・・・文才をください・・・

5 話（前書き）

がんばります

5話

く夢の中く

「ここは・・・？」

僕は、見渡す限り何もない真っ白な世界で立っていた。

ここは何処だろう？僕は何をしてるの？

「ねえ！誰かいらないの？」

僕は出せる限り叫び、誰かいないか探していた。

しかし、聞こえるのは僕自身の声のみ、不安で押しつぶされそうになっていく。

「嫌だよ・・・一人なんて・・・誰か助けてよ・・・こんな所に居たくないよ・・・」

孤独という恐怖、ここがどこか解らない不安、全てが合わさり
その場でうずくまった。

「怖いよ・・・一人にしないで・・・」

僕は誰も居ない世界でうわ言のように同じ言葉を繰り返して
いた。

「小僧！ここにお主を連れて来たのはこの私だ！」

その時、何処からか『声』が聞こえてきた。

僕は声がした方向を向くと、真っ白な世界が急に眩しくなり思
わず目をつぶった。

しばらくして目をあけるとそこには、真黒な『黒龍』がいた。

「綺麗だ・・・」

今の状況を忘れるほど、僕は現れた黒龍に見とれていた。

「小僧！さっきも言ったがお主をここに連れて来たのはこの私だ。」

黒龍の言葉で我に返った僕は、さっきまでの事を思い出した。

「だったら僕をここから早く出してよ！」

この黒龍が僕をここに連れて来たのなら、きっと元の世界に返してくれるはず。

僕はそう思い、黒龍にそうさげんだ。しかし、帰ってきた答えは驚く物だった。

「無理だ！お主を今戻す事は可能だがお主は直死ぬぞ。」

僕が死ぬ？黒龍の言葉が理解できなかった。

「死ぬってどういふこと？」

思はず聞いていた。

「そのままの意味だ。お主は崖から落ち、瀕死の状態だ。

お前に頼みたい事があつて私はお前の魂をここに連れてきたのだ。」

どうやら僕は崖から落ちて死ぬ手前らしい。そこで黒龍が僕に頼み事があり、

魂だけを連れて来たようだ。

「頼みつてなに？」

この際だから聞いてみよう。

「うむ・・実はあと10年ほどでこの大陸が揺らぐほどの動乱が始まるのでな、

そこでお主にこの動乱を止めてほしいと思ったのでな。

私が行けばかなりの混乱になる、そこでお主に頼みたいと思
いここに呼んだのだ。」

なるほど・・・黒龍が言うには大陸を巻き込む動乱が始まるよ
うだ。

「止めて欲しいって言っても、僕にそんなに凄い力なんて持つ
てないよ！」

僕は弱い、何も知らないただの男だ。大陸を救うなんて英雄み
たいな事できるはずがない。

「心配はいらん。私の力をお主にやろう。そして、時が来たら
私の牙、

黒龍偃月刀を探してくれ。」

「でも僕はもうすぐ死ぬんじゃない？」

死ぬ人間に力を与えても何も意味がない。僕はそう思った。し
かし、黒龍は。

「私の力を与えるとすることは、全ての力が強くなる、無論、
生命力も同じだ。

つまりお主はまだ死なない。だが武術はまだ弱い、だが鍛錬

するほど強くなる。

私を信じるんだ。」

黒龍は未来を僕に託すらしい。生きるならどんな事でもしてやろう！僕は未来を救う決意をした。

「良い目になったな。では行くぞ。龍の化身として復活するが良い！」

黒龍はそう言い残し僕の中に入って来た。そして僕の意識は無くなった。

5 話（後書き）

ぐたぐた・・・

毎回そんな事しか言っでなくない？

6話（前書き）

風邪をひきました・・・

頭痛い・・・

では6話目どござー！

6話

「という夢を見ました。」

僕はおじさんに夢の内容を話した。

「そうか・・・黒龍がそんな事を言っていたのか・・・世は乱世か、確かに今の朝廷は

腐敗してきているからな・・・」

おじさんもこの世の中の行く末が解っているようだった。

「なら君の背中にある龍の刺青はその黒龍なのかい？」

えっ！？刺青？僕は驚いた。本当に僕の中に居るなんて信じられない。

「そっいえば君は帰る場所はあるのかい？」

おじさんの言葉で僕は、自分の状況が理解できた。

「あつ・・・記憶もないので帰る家もありません・・・なので、

どこかで野宿などをして生きていこうと思います。

なのでそろそろ失礼します。助けてもらってありがとうございます。
います。」

僕は精いっぱいのお礼を言って立ち去ろうとした。だが、おじ
さんは

僕の腕をつかみ、真剣な顔で歩み寄った。

「なんなら私達の息子にならないかい？」

僕は驚いた。見ず知らずの僕を助けただけでも感謝のしきれな
いくらいなのに

さらに養子になるなんて・・・

「そんななおじさんの家族の迷惑になりますよ。」

養子だなんて・・・嬉しいけどこれ以上迷惑になりたくはない。

「大丈夫だよ。君を助けたのも龍のお導きだとおもつから。

君を立派な武人に育てるのも私達の役目だとおもつから。」

おじさんの目は真っすぐ僕を見ていた。何かがこみ上げてくる。

「本当にいいのですか？」

僕は最後の確認をとる。僕はおじさんに助けられる運命だったんだ。涙がでる。

「いいとも！私の名前は趙海黄龍だよ。」

君の名前は・・・趙昂天龍だ！」
ちやうてんりゅう

おじさんに名前を付けてもらった瞬間、今まで溜めていた涙があふれてきた。

そして僕は、趙昂 天龍として生きていくことになった。

「では早速、家族に紹介しようか。って寝てるか・

今日はいろいろあったからな。ゆっくり休みなさい。」

おじさんは僕の頭を撫でて部屋から出て行った。

僕の寝顔は安心した寝顔だったかもしれない。

6話（後書き）

やっと名前が出て来た。良かった。

それにしても熱が引かない・・・

7話（前書き）

更新遅れましたすみません・・・6話目を書いた次の日、熱のせいかとうとう限界が来て病院に行くと即入院させられました・・・そして無事に退院したので更新していきます!!!!!!

でわでわ7話目どうぞ！

7話

「趙昂、起きなさい。」

僕は、おじさんの声で目を覚ました。

「おじさん、おはようございます。」

「ここら私はもうおじさんではないよ。父親だよ。」

そうだった。僕は今日からこの『趙』家で暮らすんだ。

「趙昂、君を家族に紹介するから来てくれ。」

今から家族に僕を紹介するみたいだ。そういえばおじさんの事をなんて呼べばいいのだろうか？

「あの・・・あなたの事をどう呼べばいいですか？」

僕は、失礼だと思いながらもきいてみた。

「好きに呼びなさい。娘は私の事を父上と呼んでいるよ。」

父上か・・呼びやすそうだから僕もそう呼ぼう。でも娘がいるのかあ。

仲良くできるかな・・・僕は期待と不安で部屋に入った。

部屋の中はもう朝食の準備がしてあり良い匂いが漂っている。

机には父上の家族がそろっていた。

「昨日話したように、今日から我が家の家族になる趙昂だ。ほら、何か言いなさい。」

「今日からお世話になります。趙昂 天龍です。よろしくおねがいします。」

かなり緊張した、今日から一緒に暮らす人たちだから嫌な印象は絶対に避けたい

僕は、満面の笑みであいさつをした。

「私は、趙華ちようか 宵龍しょうりゅう 真名よしは善よ。

今日からあ母さんだから。よろしくね。」

綺麗な人だ。こんな人が母上でいいのか？それほど美人だった。

「趙雲 子龍、真名は星よろしく」

かなり無愛想な子だな・・・かなり睨んで来てるし、嫌われてるのかな・・・

「ちよつと星！そんな態度しないの！お兄ちゃんなのよ。」

母上が星をなだめている。やっぱり嫌われたのかな・・・僕・・・

すると星が僕にとんでもない事を言い出した。

「いいですか！私はまだ兄と認めてません！なので気安く呼ばないで欲しい！」

そう言って星は食卓から出て行った。

「ごめんね。あの子まだ緊張してるのよ。しばらくしたら慣れると思うから。」

そういえばあなたは何か武を持ってるようね。そんな気がするわ。

「

そうなのですか！？自分でも驚いた。記憶を無くす前の僕は何をしてたんだ？

「そういうことで、明日から鍛えるからよろしくね。これから2人か。楽しみ。」

母上は、満面の笑みで言った。その時の母上の顔は一生忘れないだろうと思った瞬間だった。

7 話（後書き）

病みあがりだから進む！暇な時考えてて良かった。

8話（前書き）

病みあがりの俺には敵はイナイー

8話

趙家に来て早半年、僕と星は母上はかなり鍛えられていた。

「ほら昂！ここが隙だらけよ！ 星！ここの突きが甘い！」

鬼です・・・子供相手にここまでするなんて・・・しかし、母上は

「今の内鍛えとかなないと将来大変な事になるわよ。」

だそうです。確かに10年後は混乱が始まると黒龍も言っていたし。

そのおかげと龍の力で僕はどんどん力を付けた。

ちなみに、僕は真名は付けられていない、父上曰く、

「記憶を思い出した時に真名は必ず思い出す。その時に私たちに教えて欲しい。」

と言われたのでそれまでは昂とよぶそうです。

しかし片づけたい重要な問題がある。そう、妹の星との関係だ。

ここに来て半年たったにも関わらずまだまともに話していない・
・、

話したとしても挨拶や、母上と父上の言伝しかない、兄弟らしい
会話はまだ無い。

話しかけても、気安く話しかけるなど言われる始末。いったい
どうすれば・・・・

ある日、僕と星は母上から呼ばれ、

「昂と星。今日は二人で、いつもの薬草を採ってきてちょうだい。」

「気まずい・・・・いつもは母上も入れた三人で行っていたのに・・・・」

「母上。私一人で行ってまいります。こんなのと一緒に行っても
無駄です。」

星が一人で行くと言い出した。後半はものすごい響いたが・・・

「だめよ！あなた達二人で行きなさい！」

「はい・・・」

星は、しぶしぶ納得したようだ。

そして僕達は、薬草を探し森の中。しかし会話が全く無い。

会話もない中、目的の薬草を摘み終え、帰路に就こうとしていた。

途中に通った今にも崩れそうな吊り橋にはかなり驚いた。

この際だから星の気持を聞きたいな。僕は話しかけた。

「ねえ・・・なんで僕にそんなに冷たいの？」

勇気を出して聞いた。しかし、

「別に何でもありませんよ。」

あしらわれた。そう言い星は歩きだした。僕は諦めない星の腕をつかみまた言った。

「嘘だ。何も無いならそんなに冷たくないでしょ?」

本心から言った。だが星は、

「私に触るな!何も無いと言ったら何も無い!」

そう言い、僕の腕を振り解いて走って行ってしまった。

僕は立ち尽くした。ここまで嫌われていたなんてもうどうしようもないのか・・・

しかし、何かを忘れてる気がする・・・・・・・・・・・・・・・・

「吊り橋だ!星が危ない!」

行く時に通った吊り橋は走って通ると必ず足場が崩れる。

そう思い全力で星を追いかけた。

星の姿が見えた時は、星がもう吊り橋に入ろうとしていた。

これじゃ必ず足場が崩れる。

「星！止まれ！」

叫んだ。だがもう遅かった。バキッと音と共に星の身体が傾いていく。

僕は、思いつきり手を伸ばした。

＼side 星＼

「ねえ・・・なんで僕にそんなに冷たいの？」

うるさい。ただそれだけ。だから言う

「別に何でもないですよ。」

と、もういいので帰ろうとするだが彼に腕を握られ、

「嘘だ。何も無いならそんなに冷たくないでしょ？」

もうやめて。これ以上私を苦しませないで欲しい。今までの物が
全て出て来た。

「私に触るな！何も無いと言ったら何も無い！」

私は腕を振り解き急いで走った。

あいつは私の気持ちを知らないで、いきなり家にやってきて全て
取られた気がした。

何処まで走ったか覚えていない。気づけば吊り橋に差し掛かって
いた。

あの橋はもう崩れそうだった。走って入れば必ず崩れる。

だが足は止まらない。

「星！止まれ！」

後ろであいつの声がしたがもう遅い。私の足は吸い込まれるように橋に踏み入れる。

バキツと音と共に私の身体が傾く、私はもうこれまでか・・・と思いい目をつぶる

しかし、落下する気配が無い。何かに引っ張られている。上を見るとあいつが手を握っていた。

side out

危なかった。足場が崩れ、落ち切る寸前せ星の手を掴む事に成功した。

「何をしている？早く手を離せ！死ぬのは私だけで「馬鹿！」い・・・？」

「何が手を離せた？星は僕の家族だ！そして妹なんだ！勝手に死

ぬとか言っな！」

僕は叫んだ。妹を見殺しにする兄なんていない。嫌われててもいい

大切な妹だから絶対に助ける。僕は掴んだ手を引き上げた。

「ひつぐ・・・えぐ・・・」

星は泣いていた。僕は泣きやむまで抱きしめていた。すると星が、

「私は・・・恐かったのです・・・あなたが来た時に父上と母上を・・・」

取られそうだと思ったのです・・・」

そうか・・・僕が来たからか・・・

「私も最初は仲良くしようと思ってたのですが、しかし見た瞬間、

嫌だという感情が大きくなりあんな態度をとってしまいました・

・

私は嫌われるような事をしてきました・・・」

「嫌いになんてならないよ。大事な妹だからね。」

やっと繋がった・・・兄弟として。初めて本当の家族になれた気がした。

「兄上・・・」

「あっ！初めて言った！」

僕は嬉しくなった。心の底から。

「じゃっ帰ろうか！」

と僕たちは立ちあがった。すると星が、

「兄上・・・手を繋いでもよろしいですか？」

「良いにきまってるよ。」

僕たちは手を繋いで帰路についた。夕日が僕たちを見送りながら。

8話（後書き）

初めてこんなに長く書いたぞ。

星の口調は無視してますが・・・許してください

では次の話で

9 話（前書き）

この話では一里を現代中国の一里（500M）を使います！

ではではー！

9 話

〽回想終了〽

「懐かしいな。」

俺は、この家にお世話になる理由を思い出し、しみじみしていた。

そういえばその時から自分の事を『俺』と言い出したかな。

「兄上、この後なにかありますか？無ければ私と一手付き合ってもらいたい。」

ふむ。午後からは何も無いからな、いいだろう。

「よし！星、午後からいつ「駄目よ！」しよに・・・？」

母上が駄目だと言ってきた。

「午後から私と、昂はちょっと出かけて来るから次の機会にしな

さい。」

「母上・・・何も聞いていませんが・・・」

俺は、初めて聞いて、いま決まった用事は何なのか考えていた。
熊か？

「だって今言ったし。用事って言っても近くを荒らしている賊の
退治よ。」

賊だって？この近くまでやってきたのか？前の護衛の時は何も無
かったが

今回は、賊と戦闘をするという前提で俺を連れていくだと？

「母上！なら私も連れて行ってください！」

星が行きたいと言っている。勇敢じゃないか。

「駄目よ。敵はかなりの数だと聞いているから二人を守りながら
はきついわ。」

だから星、今回は我慢してね。」

「わかりました・・・」

星はしぶしぶ納得したようだ。

「では昂。準備をして！今から一刻後に出発よ。」

母上は張り切って準備に食卓を後にした。

～一刻後～

俺は母上と賊が出るという場所に向かっていた。

川沿いを上り14里離れた山を目指して進んでいる。

しかし、8里過ぎたあたりから頭痛がしてきている。

母上に悟られてはいけない。俺は何もないよう振る舞い進んでいた。すると

「実は賊の退治は嘘なのよ。本当はあなたの記憶の手掛かりがそこにあるかも」

しれないから向かっているの。」

えっ・・・？記憶の手掛かり・・・？俺は耳を疑った。

「母上本当ですか？」

俺は嘘か本当か解らない情報に驚き、母上にきいた。

「あくまで手掛かりよ。あなたを拾ったとき川で倒れていたでしようっ？」

そして、あなたを見つける少し前に上流の村が壊滅しているのよ。

あなたがそこから流れて来たと思って連れてきたの。」

ということは、そこが俺の故郷かもしれないということか・・・

俺はそう思いながら山への道を急いだ。ひどくなる頭痛を抑えて・・・

9 話（後書き）

かなり短くなりました。すみません。

10話

山のふもとまで来た俺と母上。目的地まであと3里までというところだが、

俺の頭痛が耐えれないほど強くなっている。まるでここに来るなと伝えているかのようにな。

母上に悟られてはいけない・・・心配させてはいけない・・・

しかし、いくら耐えようとしても限界があり俺はとうとう倒れてしまった。

母上が血相を変えて走ってくるのが見える。だが目が霞んでいく・・・

母上の言葉が何も聞こえない。地面が近くなってくる。

そして意識が無くなった。

「くっ・・・」

俺が意識を取り戻した時はもう辺りは暗くなっていた。そして今は洞窟の中だ。

「目を覚ましたのね。昂、あなた大丈夫なの？急に倒れたりして何かあったの？」

母上が心配の面持ちで聞いてきた。

「はい・・・8里位来た辺りから頭痛がしてきて、目的地まで3里というところで、

耐えれなくなりました・・・」

「そうなの・・・今は大丈夫？」

多少頭痛がするが耐えれないほどではない。

「はい。今は大丈夫です。」

俺は心配ないという表情をした。

ん？何だこの感覚・・・この先に何かあるのか？

身体が勝手に立ち上がり、引き寄せられるように歩いていく。

「ちょっと！昂！何処に行くの？待ちなさい！」

母上の言葉が聞こえるが身体が前に進んでいる。

しばらく歩いて行くと、そこには祠があった。

足はこの祠を目指しているようだった。目の前に来ると自然に足が止まる。

母上も一緒に止まり、祠の中を覗く。

その中には、真黒な刀身に、龍の頭を模りそこから刀がでている。全て黒の武器があった。

「こんなところに凄い物があるものね、いったい誰の得物かしら？」

母上が首を捻って考えているが俺は祠に近付いた。

「黒龍偃月刀・・・」

俺はそう呟き、偃月刀を握った。すると偃月刀の中に吸い込まれて行く感覚がした。

・

・

・

・

・

「小僧。起きよ。」

俺は昔聞いた声で目が覚めた。そこは、真っ白な世界であり、黒龍がいた。

「久しぶりだな。偶然とはいえ、良く我が牙を手にしたな。」

確かに・・・ここに来たのも俺が頭痛に耐えられず、母上が洞窟に運んでくれたおかげだ。

「何故俺はここによばれたんだ？」

「ふむ・・・お主。偃月刀を持ってみる。」

俺は、言われた通りに偃月刀を持ち上げようと握った。

ズシン・・・

俺は偃月刀がこれほど重い物だとは思わなかった。

「重いだろう？このまま我が牙を渡してもかまわんが、うまく振れないのならば持っている意味がない。この重みは想いがあれば軽くなり振れるようになる。我が牙を振るう理由を見つけてまいれ。出直してくるがいい。」

黒龍がそついうと、俺の意識は飛ばされた。

・

・
・
気づくとまた祠の前だった。偃月刀を抜こうとしてもびくともしない。

これを振る理由か・・・何だろう・・・解らない。

「母上。この得物は昔話した黒龍の牙です。そして先ほど黒龍に会い、話してきました。」

「そうなの・・・で、黒龍は何ていつていたの？」

母上に聞けば答えが出るかもしれない・・・

「母上、黒龍から、我が牙を振るう理由を見つけて来るよう言われました。」

その理由とは何なのでしょう・・・」

しかし母上から返って来たのは違う答えだった。

「その理由は、あなた自身で見つけないといけないことなの。」

自分で見つける。母上がそう言ったが、やはり解らない。

「すぐに解らなくていいのよ。いつか気づく時が来るから

その時に理解しなさい。そしたらあなたはもっと強くなるから。

その時にまたここに来なさい。」

そんな物は見つかると俺は思っていた。

「なら出発しましょう。もうすぐ目的地だから。」

母上がそう言い、俺達は歩きだした。

10話（後書き）

大丈夫かな？・・・？

11話（前書き）

10話ちよっち変わっているのではありません。

11話

ズキン

俺と母上は、俺の故郷だと思われる壊滅した村を目指していた。

しかし、また頭痛がしてきた。

「昂、大丈夫？」

母上が心配しているがさっきよりは楽だ。

「大丈夫です。先ほどよりは楽なので。」

母上は良かったと言い、歩き始める。

しばらく歩くと道の脇に道があった。俺は何だか行かないといけないような気がして足をそっちに進める。

道を抜けると見開いた場所に出た。不思議な事に頭痛がしていない。

「どうやら崖みたいね。道を間違えたようだし戻りましょう。」

母上は戻ると言いだったが、俺は崖に向かって更に足を進めた。

ズキン！

その時、今までで一番激しい頭痛がしてきた。だが意識は失わず、保ったままだった。

同時に何かが頭の中に入ってくる。

・

・

・

・

「もう止めて下さい！」

誰かの声がしている。振り向くとそこには子供を抱えた女性と剣

を持った男性がいた。

しばらくして子供の姿が見えた。そこに居た子供は、「俺？」

子供の時の俺がいた。かなり怯えているようだ。という事はこの女性俺の母親なのか？

だが肝心の顔は霞みがかかったような感じで見る事ができない。

「村人を皆殺しまでして、どうしてこんな事をするのですか？」

この男は村人を皆殺しにして更に逃げた俺と母親？を追いかけてきたらしい。

「知った事を・・・村人を殺したのは我が力を試したいからだ。

本当の目的は龍の血を引くこいつの始末だ。今すぐどけ！」

この男の目的は俺を殺す事らしい。どうにかしたいが身体が動かない。

「この子には指一本触れさせません！」

母親？が子供の俺の前に立つ。しかし男はそんな事も気にせず話す。

「今はただの子供・・・だが血が覚醒すれば、俺の邪魔になりかねん。」

邪魔するのなら貴様から殺す！」

そう言い男は母親？に斬りかかる。

助けないと。だが身体は動かない。

男の剣が母親？に迫る。だが母親？はそれを止める。

「私も少しだけ龍の血が流れているのよ。ちょっとの時間稼ぎ位出来るわ。」

烈火！早く逃げなさい！」

「ふむ・・・だが今の俺には到底及ぶまい！子供諸共葬りさつてくれる！」

そう言い男の剣は二人に振るったが、斬られたのは母親？だけであった。

倒れていく母親？子供の俺は倒れた母親？を揺さぶっていた。

「お母さん？起きてよ・・・起きてよ・・・」

子供の俺の悲痛な鳴き声が木霊した。

「すぐにお前も母親の元へ送ってやる。」。

「うあああああああつ！！」

突然子供の俺が叫びだした。顔を上げると様子が変わっていた。目が赤くなっていたのだ。

「何故、お母さんにこんな事をしたんだああ？」

男にそう言い子供の俺は男に立ち向かって行こうとした。

ブツン！

そんな音と共に俺が見ていた物は終わった。

・

・

・

・

現実に戻った俺はさっきの事を整理していた。

今見たのは、あの時の俺が見ていた物・・・すると今は俺の記憶の断片・・・少しだけ思い出せたが・・・

・

・

だが解らない事も多すぎる・・・龍の血って何だ？そしてあの目・

だが一つ思い出したのは俺の真名だ。

俺の真名は烈火だった。他にも気になるが、自分の真名を思い出

せたので良かった。

「昂・・・大丈夫なの？かなり辛そうだったけど・・・」

先ほどの頭痛の心配しているようだがこれは言うておかなくてはいけない。

「母上！一つ思い出しました。俺の真名は烈火です！烈火とお呼び下さい。」

「そうなの？記憶が戻ったの？」

まだ全て戻った訳ではない。ほんの一部だけだ。

「いえ、まだほんの一部にすぎません・・・ですが真名を思い出した事により

他の記憶も見つけやすくなるとおもいます。」

「なら烈火。これからあなたの村に向かうわ。覚悟してちょうだい。」

母上はそう言い、また村を目指して進みだした。俺もそのあとを追った。

11話（後書き）

何か無理やり感がある・・・ごめんなさい

感想お待ちしております！

12話（前書き）

こんばんわ！！

がんばります！

12話

自分の真名を思い出した俺は、母上と俺が生まれた村の跡地に進んでいた。

少し記憶が戻ったおかげか、頭痛は無くなっていた。

しかし、新たな問題も浮上してきたのだ。

【黒龍偃月刀を使う理由】だ。解らない・・・母上は何か解っているようだが教えてくれない。

「烈火。着いたわよ。」

いろいろ考えているうちに、目的地まで着いたみたいだ。

その村の跡地を見渡すと、家が在ったであろう場所は、木材の破片が飛び散り、

焼かれたであろう家は焦げ跡になり、悲惨な状態であった。何軒か形を保っている所もあるが、

そこも直に崩れて行きそうだった・

許せない・・・あの男が自分の力を試しただけに、俺の故郷を壊したと思うと、

心の奥から、悔しさが出て来た。

「烈火、この村を見てどう思ったの？悔しいと思ったのなら、この悔しさを

忘れては駄目よ。この世の中にはこのような村が何百、何千と在るのだから・・・」

まだこんな村が在るだと？俺は母上から聞いた話に驚いた。

それと同時に、俺の中で何かの感情が芽生えた。

「何か決意したみたいね・・・なら帰りましょうか。」

母上は、俺からの何かを感じたらしく、満足そうに帰路につこうとしていた。

俺も帰ろうとしたとき、「烈火！逃げなさい！！」

母上のそんな声と共に、俺は茂みに飛ばされた。

茂みから顔を出すとそこには、300人位の賊と対峙している母上の姿があつた。

母上が危ない・・・助けにいかないと・・・だが恐怖で近づけない。

「女がこんな所で何をしている？」

賊の大將らしい人がそんな事を言っている。

「そんなのは私の勝手であろつ。」

母上が殺気を放ちながら答える。俺は見ているだけしか出来ないのか・・・？

「ここは俺達の縄張りだ。来たからには返す訳にはいかねーなあ！

それに、良く見たらお前良い女じゃねーか！俺の女になれ！」

男がドスの聞いた声で母上に言い返す。

「断る！私がお前達みたいな者達に遅れを取るとでも思ってたか？

寝言も休み休み言うがいい！」

母上の言葉に腹を立てた賊の大將が青筋を立てている。

「許せねえ・・・お前ら！この女を捕えろ！」

その掛け声と共に、他の賊たちが母上に突っ込んで行く。

「趙宵龍！参る！」

母上も同時に突っ込んでいった。

母上の武は凄かった。数では圧倒的に不利だがそれも関係無いかのように敵を斬っていく。

首が飛び、血が舞う。辺り一面は死体の山になっていた。

俺はかなりの吐き気がこみ上げて来た。俺自身は、目の前で殺し合いが行われていることが信じられなかった。

母上は圧倒的な武で敵を片づけて行く。母上の武で、賊は逃げ出そうとしている。

「お前ら！女一人に何をやっている！数で押せば勝てる！突っ込め！」

大将の声に、突っ込んでいく賊たち。だが母上に圧倒される。

しかし、半分を過ぎたあたりで母上の様子が変わった。かなり肩で息をしている。

どうにかしないと・・・だが恐怖で身体が動かない。

「女が疲れているぞ！今が好機だ攻めろ！」

また突っ込む賊たち。母上も抵抗する。だが、数には勝てず、と

うとう隙を作ってしまい、

敵の一撃を貰い気絶してしまう。

「けっ！手こずらせやがって。お前ら！帰るぞ！」

そう言い賊達は大きな建物の中に入って行った。

俺はその場で崩れた。母上が危険な時に何もできなかった自分が情けなかった。

悔しい・・・俺はこのまま家に帰るのか？嫌だ・・・母上を助きたい。

だが力も武器も無い・・・武器も無ければ母上を助けられない・・・武器・・・？

俺はあの祠にあった黒龍偃月刀を思い出した。あれが在れば母上を助けられる。

そう思った俺はすぐに、祠に向かった。

祠に着いた俺はすぐに偃月刀を握った。そして俺の意識は吸い込まれた。

「小僧！何の用だ？」

黒龍が俺に聞いてくる。

「お前の牙が欲しい！」

「何故私の牙を求める？」

俺は母上と賊の一戦を思い出しながら答える。

「俺の母上が賊に捕まった。母上を助け、守りたい！だから俺はお前の牙を求める！」

俺は迷い無く答え、黒龍を見つめる。

「小僧！良い目になったな。よし！私の牙を持って行くがよい！」

黒龍がそういつと偃月刀の中に入って行った。俺は偃月刀を持ち上げた。

すると、俺の中に、何かが入って来た。さっきまで重かった偃月刀が嘘のように軽い。

身体が軽い。かなり力が湧く。俺は偃月刀を担ぎ、賊達の住処に急いだ。

12話（後書き）

更新しました。

感想お待ちしています。

あと一刀も出した方がいいのか迷っています。

そのあたりもみなさんの意見を聞きたいです。

よろしくおねがいします。

13話

助けたい。賊に捕まった母上を何としてでも助けたい。

俺は賊の住処の前に来た。だが目の前まで来ると俺の身体は動かなくなった。

ここに乗り込むという事は母上を助ける代わりに、賊を殺すという事、

俺に出来るのか？ 怖い・・・早く行かないと母上が危ない。

俺は賊の住処に入ろうと扉に手をかける。その時、

「嫌あああつ！」

母上の叫びが聞こえたと同時に俺は扉を勢いよく開けた。そこには、

衣服を破られ、身体に傷を作り、ボロボロになった母上がいた。

その母上を見た俺は奥から怒りが込み上げてきた。

「お前らアアア！母上に何をしたアアア？」

俺は怒りのままに声を荒げた。

「何だあ？ガキが一体何の用だ？ここを見たからには生きて帰れると思うなよ。」

賊が言っているが今の俺にはどうでもいい。

「ガキを殺せ！」

賊の大將がそう言つと他の賊が俺に向かって来た。

俺はさっきまでの恐怖心が不思議と無かった。在るのは母上を助けたい、ただそれだけ。

一人の賊が俺に剣を振り落としてくる。俺はそれを避け、偃月刀を賊に振るつた。

斬られた賊は胴体と足が真つ二つになり絶命した。

これが人を斬る感覚・・・胃からこみ上げてくる胃酸。それを無理やり呑みこみ賊と対峙する。

一撃で賊を斬った俺に、賊達は呆気にとられたが直ぐに俺に向かってきた。

そこからはよく覚えていない。気づくとそこには賊の死体が転がっていた。

これが殺すということ。母上を助けた俺は人を殺したという罪悪感に支配されていた。

「烈火・・・あなたが来てくれなかったら、私はもっとひどい仕打ちを受けていたわ。

あなたは良い事をしたのよ。この人達の魂をあなたが背負い、この人達に分まで

生きなさい。今は思いっきり泣きなさい。」

「うわあああああっ！」

俺は思いつきり泣いた。母上の言葉に少し心の罪悪感が晴れた気がした。

俺が泣きやんだのはしばらくしてだ。

「落ち着いた？」

母上の言葉に俺は無言で頷く。

「では帰りましょう。みんな待ってると思うから。」

こうして俺と母上は帰路に着いた。

この一件で俺は大きく成長したと思う。俺の故郷みたいな所がまだ沢山ある。

こんな世の中をどうにかしないといけない。俺はこの決意を新たに、母上の後を追った。

13話（後書き）

なんかまた短い・・・

感想おまちします。

14話（前書き）

どうもボーズです。最近毎日メンマを食べています。

ではどうぞ。

14話

俺が自分の真名を取り戻してしばらくが経ち、俺は母上と一緒に、近くをうろつろしている賊を退治している。

村を荒らし、民を殺している賊は生きるために略奪、殺人しているのだ。

俺達が襲われている村を救っても、同じ人間を殺めていると思うと、

良い気分にはならない。助けた村人達から感謝をされると少しだけ気が晴れる。

そして、今日も賊に襲われた村を救った。

「母上。こちらは終わりました。」

俺が賊の退治の終わりを知らせた。

「どうしたの？浮かない顔をして？」

俺の心中は、かなり複雑だ。それに気づいたのか母上が声を掛けてくれた。斬っていく賊の最後の顔。

俺を睨み、怨みながら死んでいく顔は一生忘れられない。

「いえ・・・人を斬ると、心が痛いのです。いくら賊でも同じ人間。」

この人達のこれからを奪ったと考えると辛いのです。」

俺はうつむき、偃月刀を強く握った。

「烈火。その痛みは絶対に忘れては駄目よ。その痛みを忘れた時は、

この賊みたいにな、人を殺すということが快樂になってしまうから。」

母上にそう言われた時、俺の目から、ひとすじの涙がこぼれた。

しばらくして、俺は一人で賊の退治をするようになった。

そして、近くの村などの賊退治をしているうちに、俺に噂が付き始めた。

背中の龍を見た者は生きて帰れないという事から、龍の化身と言われ始めた。

そして今日も賊を退治し、村の人達から感謝されていた。

「龍の化身様、我が村を救っていただきありがとうございます。
よろしかったら食事を準備していますので、食べて行ってください。」

村長が食事を用意してくれていたので、その行為に甘えることにした。

食事をしていると、一つの食べ物が目にとまった。

メンマだ。俺はメンマを口にいった。その時、身体中を何かが突き抜けた。

「うめっっ!」

なんだこのメンマのおいしさ。こんなメンマは初めて食べたぞ。

俺はこのメンマの味に感動していた。

「すみません。このメンマはどう作っているのですか？よろしかったら教えていただきたい。」

俺はダメもとでこのメンマの製造法を聞いた。

「本来はお教えできませんが、村を救っていただいた方ですのでお教えしましょう。」

そう言い、村長はメンマ職人を呼んできた。こうして俺はメンマの製造法を教えてもらい家に帰った。

村に帰った俺は、早速メンマを作り始めた。

「兄上、何を作っているの？」

星が気になったのか横から覗いてくる。

「メンマを作っているのさ。星はメンマは好きか？」

「まあ食べれないって事は無いですな。」

星はあまり好きではないのか。完成したら食べさせてあげよう。

「完成するまで待つてくれ。絶対に好きになるぞ。」

星は楽しみにしています。と言い、母上と賊の退治に出かけた。

ひと月が経ち、ようやくメンマが完成した。ちなみに、さらに工夫したのであの味を超えた。

「おーい！星。完成したぞ。食べてみてくれ。」

星は恐る恐るメンマを口に運んだ。すると、目を見開き、直ぐに表情が崩れ、しあわせそうな顔になった星がいた。

「兄上・・・このメンマはなんという味なのでしょう。今まであまり食べていなかった私が恥ずかしいです。」

気にいってもらえたようだ。俺は満足して食べようと皿に箸を伸ばしたが、皿の上には何も無い。

星の方を見ると星の皿にはメンマの山が出来ていた。

それからというもの、毎日のようにメンマを作るようになって来る星がいたのだ。

14話（後書き）

メンマ話しを書きたかっただけです！

感想お待ちしています。

15話（前書き）

おねがいします！

では15話でございませう！

15話

俺がメンマを作ってから、星がメンマを好きになり、さらに俺に懐くようになった。

「兄上、今日も賊を退治に行きましょうぞ！」

最近の賊の退治は、母上の代わりに俺が星と一緒に行くようになった。

俺と行動している星は何か活き活きしているように感じる。

「兄上。今日の賊の退治が終わったらまたメンマを食べさせてください。」

「最近の兄上は昔と違い、たくましくなれました。」

など色々言っただけ。そんな事をしてるうちに、賊が現れるという村までやってきた。

「わざわざ遠い所からすみません。この村は賊に襲われ、男達はほぼ皆殺しに合いました。」

残っている者も手負いや、老人、子供ばかり、この村が滅びゆくのも時間の問題。

そして、しばらくしたらこの村の食糧を奪いに賊がまた攻めて来るでしょう。」

この村の村長が涙ながらに今の状況を説明してくれた。

「では今からその賊を退治に行きますので、賊は何処からやって来るのでしょうか？」

一刻も早くこの村を救いたい。今の俺の頭の中はそれで一杯だ。

「賊はここから20里離れた所から来ております。まさかお二人で行くつもりで？」

村長は驚いたように言っていた。

「ええ。そのつもりですが。星行くぞ。」

俺は当たり前のように村長にそう伝え、星を呼び、村を出ようとした。

「お待ち下さい！相手は二千位いるのですぞ！お二人では無理でしょう！」

村長が声を荒げて俺達を止めた。

「大丈夫です。俺は龍の化身と言われている。心配はいりません。」

俺はそう言い、星と一緒に賊の所へ足を進めた。

辺りを警戒しながら俺達は賊の住処にたどり着いた。

どうやら入口には見張りがいるようで、俺達は木陰で様子を覗いていた。

「兄上。私が斬りこんでまいります！」 「星！待て！」

星は俺の制止を無視して賊の住処に攻め込んで行った。

「我が名は趙子龍。村を襲う賊め！我が槍の餌食となるがいい！」

星がそう叫ぶと賊達が出て来た。あの馬鹿者。俺はそう思いながら星の後を追った。

「なんだあゝ？ たった二人で俺達の相手をするのか？ いい度胸じゃねゝか。」

お前ら！ 女は捕えて男は殺せ！ 掛れ！」

そう賊の頭が言つと賊達が攻めて来た。

「ハイ！ ハイハイハイハイ！」

星はかなりの勢いで敵を蹴散らしていく。俺はそんな星に違和感を感じた。

「兄ちゃん。よそ見していると危ないぜ！」

そう言いながら賊が俺に斬りかかって来る。俺は軽く避け、堰

月刀で首と胴体を切り離す。

それを見た賊達が血相を変え、攻めて来た。

俺は心の中で賊にすまないと思いながら賊を斬っていく。

「ひいいいっ！強すぎる！俺達じゃ敵わねえ！」

半分位斬った所で、賊が戦意を消失し逃げていく。

「俺は龍の化身と呼ばれている！命が欲しくば、武器を捨て、ここから立ち去れ！」

俺がそう言っていると賊が逃げていく。だが星が戦意の無い賊に追撃をしていく。

「星！もう止めろ！これ以上無駄な殺生はするな！」

俺がそう言うと、星が不思議そうな顔で俺を見ていた。

「何故です？あの賊という下衆の集まり、斬り殺して何が悪いの

です？」

俺は耳を疑った。今星は何て言った？斬り殺して何が悪いだと？その一言で頭に血が上る。

「星！お前は人を斬る事に何も感じないのか！？」

「こやつらは今まで沢山の人を殺めて来たのですぞ？悪を斬る事には何もためらいは在りませぬ！」

パン！

俺は星の顔に平手打ちを入れた。

「俺はそんな事を言っている訳じゃない！賊とか関係なくお前は人を斬り殺す事に」

罪悪感があるのかと聞いている！母上から何も聞いてないのか？

人を殺す事に罪の意識が無かったらお前も賊と同じなんだぞ！」

俺の言葉に星は何かに気づいたような顔になり、やがて眼には多くの涙があふれて来た。

「兄うゝえ・・・私が・・・間違ってしまじだ・・・今の私は賊と一緒に・・・大切な事に・・・」

気づかせて・・・くれで・・・ありがとうございます・・・

「

星は俺の胸の中で大きく泣いた。大切な事に気づく事が出来た星はさらに強くなるだろう。

そう思いながら俺は星の頭を撫で続けた。

しばらくして星も落ち着き、村まで帰った。

「賊を退治してくださりありがとうございます。村人を代表して感謝いたします。」

村長のお礼を聞きながら俺は決意をした。まだこの村みたいな所が沢山ある。

多くの人々を救いたい。もっと笑顔を作りたい。この腐った世の中はうんざりだ。

旅に出て、みんなを笑顔にしていきたい。俺は旅に出る決意をした。

そう思いながら村を後にした。

帰り道、俺は悩んでいた。龍の化身として噂がたっているのはいが顔を見られるのは何か恥ずかしい。

何か顔を隠す物はないか・・・そう思っていると目の前を一匹の蝶が横切って行った。

これだ！仮面を作れば良い。蝶の仮面・・・何か良い名前は・・・華蝶仮面なんてどうだ？

よし！旅に出る前に早速帰ったら作ろう！

俺は気分良く自分の村に帰っていった。

星からは変な目で見られながら・・・

15話（後書き）

やっと旅にでるところまで来ました。

感想お待ちしてます！

16話（前書き）

前のやつが16話になってた・・・

訂正しますた。

16話

星と賊の退治から帰ってきて俺はさっそく、仮面を作り始めた。

かなりの試行錯誤を繰り返して、ようやく完成した。

「ふっふっふっふっふ……この流れるような形。完璧だ。」

俺は暗い自室で笑っていた。その時、外で誰かの気配がしたので、俺は仮面を慌てて隠した。

「兄上、何を作っているの？」

ひょっこりと顔を出し、星が覗いて来た。

「何も無いぞ。星もこんな時間にどうしたんだ？」

「いえいえ。兄上の部屋から奇怪な笑い声がしたものでついつい気になる、」

いけない物だと解っていました。が好奇心には勝てず覗いてしまいました。」

星がニヤニヤしながらこちらの様子を覗っている。だがこの計画は誰にも知られる訳にはいかない。

星には悪いが白を切らしてもらつて。

「本当に何も無いぞ！確かに笑っていたがそれはお前にだ！

かわいい妹が今日の賊退治で成長したのに高揚して何が悪い！」

自分で言つて恥ずかしいし、気持ち悪い・・・いくら言い訳でもこれはちよつと・・・

でも星の成長が嬉しかったのは本当だぞ。

「嘘ですな。兄上は帰りからニヤニヤしてましたので・・・」

図られた！最初から気づいてたのか！ここまで来たら俺も突き通す！

「だから星にだって言ってるだろ？それよりもメンマ食べるか？」

俺はダメ元で星の意識を逸らそうとした。どうだ？乗って来い。

「絶対に嘘ですな！あのときからえ？メンマですか？いただきます！す！」

よし。なんとか星の意識を逸らせたぞ。

「それより星。話が有るんだが・・・」

俺が旅に出る事は最初に星に伝えたかった。

「ふぁんべふか？」

星よ・・・食べてる時には喋らない。あれほど教えたのに・・・

「今まで賊を退治してきたが、それはこの辺りの賊だ。だがこれ以上に酷い所もある。」

だから俺はその村などを救いたい。だから俺は旅に出る！

それに俺の記憶も取り戻さないといけないしな。」

「そうですか・・・今日の村で兄上は決意してたようですので私に止める権利はありませぬ。

さみしくはなりますが、これも兄上の為・・・気をつけて行ってください。」

そう言いながら星は俺の部屋を出て行った。

あれ？星なら着いて来るとか言ってきそうだったんだが・・・まあいいか。

明日、父上母上に旅に出る事を伝えよう。そう思いながら俺は眠りについた。

次の日

「父上、母上、俺は旅に出たいと思います。今まで近くの賊を退治をしてましたが、

他の所でも同じようになっていくはずですよ！この世の中を見て回りたいのです！」

俺は真正面から二人に気持ちをぶつけた。

「そろそろ言う頃だと思ってたわ。あなたもそう思うわよね？ 良いでしょ。行くといいわ。」

母上から思いもしない返事がきた。解ってたのか？

「そうだね、これもいい経験、烈火、がんばってきなさい。」

父上からも激励を受けて俺が旅に出る事は正式に認められた。

「ならばこの後出発したいと思います！」

うかうかしてられない！あんな村を沢山出すわけにはいかない！俺は荷物をまとめて、

自室へと向かった。

路銀よし。食糧よし。堰月刀よし。そして忘れてはいけない仮面よし！

俺はしっかり確認して出発するため最後の自室を出た。外には俺

の出発を聞きつけた

村人全員が来てくれた。みんなから激励を受けていたが、星の姿がない。

「星は寂しくて泣いてる所を見られたくないのよね。」

母上が笑いながら言っている。まあ星とは昨日言ったから大丈夫だろ。

「ではみなさん！趙昂行ってまいります！」

そう言い、俺は村を出た。みんな最後まで手を振っていたがその時。

『フオオオオオオっ！！！！！！』

何かの叫び声が聞こえた。何か星の声っぽかったきがするが・・・

俺は気になったが、盛大に見送られて、また戻るなんて恥ずかしいのでそのまま足を進めた。

俺の荷物から仮面が無いのを気づかずに・・・

16話（後書き）

ようやく出発しました。

長かった？のかな？次はちょっと間話しを入れます！

感想お待ちしております！

16・5話（前書き）

今回は星の話です！

16・5話

「俺は旅に出る！」

兄上がそう言った。薄々感づいていた事だった。

兄上は近いうちに必ず旅に出て行くだろうとここ最近の賊の退治で思い始めた。

「そうですね・・・今日の村で兄上は決意してたようですので私に止める権利はありません。」

「さみしくはなりますが、これも兄上の為・・・気をつけて行ってください。」

私はこれだけの言葉しかかけられなかった。本当は私も行きたい。

だが私はまだ未熟だ。力はもう問題ないはず・・・だが以前、兄上に言われた言葉。

『人を殺す事に罪の意識が無かったらお前も賊と同じ』

その言葉を聞いた時、私の未熟さに気づくことができた。

今旅に出てしまえば、また以前の私みたいに殺す事に罪を感じない者になると感じ、

兄上の旅には同行しないと決めていた。

私は泣きそうな顔を見られたくないため、兄上の部屋から出て行った。

自室に着いた私は、思いっきり泣いた。兄上がいなくなる。

そう思うだけで、悲しくなる。解っていた事なのに・・・私は初めて心の中から泣いていた。

やがて泣き疲れて眠ってしまったのかいつのまにか朝だった。

外には兄上の旅立ちを見送る村人がいた。私も早く行かないといけない。

そう思い、私は急いで部屋を出ようとしたが足が止まる。

私の目はかなり腫れている。この顔を見られたらかなり恥ずかしい。

兄上の部屋からなら見られる！私はそう思い急いで兄上の部屋に行った。

兄上の部屋まで来ると、もう出発しそうだった。私は窓まで行くとしたら、

何かにつまずき、派手にこけてしまった。

何につまずいた何かを見るとそれは、蝶の身体を似せて作ったのか、かなり美しい物だった。

私はその仮面を見つめる。付けたい。今の私を支配するのはそれだけである。

じゅ……ドキドキドキ……

付けたい……どうしても付けたい。いけないと解っているが止まらない。

吸い寄せられるように私は仮面を付けた。

仮面を付けた瞬間、私に何かがこみ上げてくる！

「フオオオオオオッ！！」

変な奇声を出しながら私は華蝶仮面になったのだ・

16・5話（後書き）

短かったです・・・

感想待ってます！

17話（前書き）

いきなり一年ほど早まります！

17話

俺が村を出てもうすぐ一年になる。

この一年はいろいろあった。やはり最初は、仮面の紛失だ。

村を出てからしばらくし、腹が減ったので食べようと思い、袋を開けようとした時に俺は有る事に気付いた。

仮面が無いのだ。いくら探せども見当たらない。袋を良く見ると、仮面を入れた所に穴が開いていた。

つまり、家を出る時にはすでに落ちていたということになる。自信作だったのに・・・

仕方なく仮面は泣く泣く諦めることにした。

今は旅の武芸者兼メンマの商人として旅をしている。

ついた村や街でメンマ売りや、攻めて来た賊を退治して路銀を稼いでいる。

商人もしているので、俺自身も賊に襲われる事もかなりあった。

朝廷が腐っている証拠だとしみじみ感じた。

これがこの一年で感じたことだ。

そして最近、変な噂を聞くようになった。

行く街などで良く聞く、天の御使いというものだ。聞いている予言は、

『空から流星が舞い降りる時、天からの使者が現れん。時に、背に龍を抱えし者、

乱世を終わりに導かん。』

と聞いている。一つは明らかに俺の事だ。俺って凄い立場にいるんだなとしみじみ感じた。

天の御使いはいったい何だろ？

そう思いながら、俺は次の村を目指し、荒野を歩いていた。

すると、空が急に明るくなり、俺は空を見上げた。そこには流れ星があつた。

予言は本当なんだと思いながら俺はその星を見ていた。

その星は明らかに一つの方向に落ちてきている。俺に向かって・

「冗談じゃねーぞ！」

俺は全力でそこから逃げた。

ズドン！

そんな音と共に、流れ星は地面に落下した。俺のメンマが犠牲になつたが・・・

何だろ？目から汗が出てきてる。そんなことより俺は星が落ちた所を恐る恐る覗いた。

そこには見たことも無い衣服を身に纏い、気絶している男がいた。

「なんだ？こいつ・・・」

俺はそいつを起こそうと近付いた。賊に襲われちゃかわいそうだし。その時。

「ちよおと待ちなさあい！」

そんな声と共に現れたのは、鍛え上げられた筋肉に小麦色の肌をし、耳の所だけおさげをし、

もつとも目を引くのは陰部にきわどい、桃色の下着を身に纏った化け物がいた。

17話（後書き）

登場！一刀&貂蝉！

18話（前書き）

久しぶりです！

でわどうぞ！

18話

「ギヤアアアっ！化け物おっ！」

俺は目の前に現れた物体にかなり混乱していた。

「あら失礼ね。私は貂蟬。魅惑の踊り子にして、絶世の美女。れつきとしたオ・ト・メよん！」

「こんな人外な物の何処が乙女なんだよ・・・」

俺はこの貂蟬という男？に吐き気がしていた。

「違うわん！漢女よ。ところで話しは変わるけどいいかしらん？」

急に貂蟬が真面目な顔をして俺に向かい合った。気持ち悪い・・・

「あなた、龍の化身の・・・今は記憶を無くして趙昂 天龍の名前で間違いないかしら？」

こいつ・・・俺の何かを知っている・・・貂蟬の言葉に俺はそう

感じた。

「確かに間違いない。だが一つ聞きたいお前は俺の過去を知っているな？」

こいつは母親を殺した奴かもしれない。自然と黒龍堰月刀に力が入る。

「ええ・・確かに知ってるわ。でも安心してねん、あなたの母親を殺したのは私じゃないわよん。」

私もその男を追っているのよ。」

貂蟬もそいつと何かの因縁があるようだ・

「でも私は直接その男に接触できないの。それが出来るのはアナ・タだけなの。」

腰をくねらせて言っている。行動一つで吐き氣がくる。

「事情はわかったからとりあえず腰をくねらせるな！ところで何でそんなに嬉しそうなんだ？」

さつきから落ちて来た男の方をかなり見ている。

「あつらゝん！気づかれちゃったみたいねゝん。この人は私の愛するご主人様なのよっ！」

あんな露骨な態度してたら誰でも気づく。それよりこの男は災難だな・・・

「こいつをどうするんだ？」

俺は何気なく貂蟬に聞いてみた。

「なゝに。連れて帰って私のたつぷりな愛を注ぎ込むのよっ。」

聞かなければ良かった・・・俺はかなりの後悔につぶされそうだった。

「それじゃ、私はご主人様を連れていくわん。くれぐれも死なないでねん！」

この世界の命運はあなたにかかっているんだからん。最後にこれを渡しとくわん。」

そう言いながら貂蟬は、下着の中から首飾りを出してきた。

「ちょっと待て！今お前は何処からそれを取りだした！？」

「何処からって私の愛情の下着の中よん。」

貂蝉はそう言いながらその首飾りを無理やり俺に掛けた。生温かい……

「それは龍の爪よん。アナタの力になるはずよん。」

それなら確かに有りがたいが出て来た所を考えるとすつごく嫌だ。

「それじゃ、ねん！ぶうるうああああ！」

奇声を上げながら貂蝉は少年を連れて走って行った。

「ギヤアアアアアアアアアつ!!!」

変な声、助けを求める声が聞こえたが、聞いてないふりをした。

これからどうするか・・・とりあえずメンマを作り直して、待ちを指摘するか。

俺はそう思いながら、なんとか残ったメンマを回収して次の街を目指した。

18話（後書き）

短いですが更新しました！

貂蟬の所ちゃんと書けたかな・・・？

いよいよ次は恋姫武将が登場します。

感想お待ちしてます！

19話（前書き）

どうも19話めです！

ようやくあの人達がでてきます！

19話

貂蟬と別れた後、俺は街に壊れた荷台の変わりを買いに行き新しい荷台と共に、

今は湖のほとりの森を進んでいる。

「後で水浴びでもするかな。」

そう呟きながら俺は荷台を引く足を止め、辺りを覗いた。

すると木の陰から賊が30人ほど出て来た。

「よう！商人さん。死にたくなかったらその荷物と金を置いていきな！」

賊の頭らしい人物がそう言ってきている。まあ護衛も付けず、一人で物売りすれば、

格好の獲物になるよな……これで何回目だろ？

そう思いながら賊と睨みあう。

「おい！聞こえねーのか？荷物と金を置いてどこかに失せろと言
ってんだよ！」

「へへっ。アニキ！たぶんこいつ恐くて動けないようですよ！」

賊の頭と手下が何か言ってるようだが別に恐くはない。

明らかに斬りかかってくるよな・・・あまり人は傷つけない
が仕方ない・・・

「断る！！お前達に置いていく物なんて無い！」

「なに？お前一人で何ができる？お前達！こいつを殺して全て
奪ってしまえ！」

その掛け声と共に、賊達が一斉に向かってきた。

ん？何か向こうにも気配がうつするぞ？

そう思いながら賊との交戦が始まった。

side?

「ねえ！あそこで商人さんが賊に囲まれてるよ！助けなきゃ！」

わたしは、一緒に旅をしている二人に商人さんが危ないから助けて
ようと言った。

「どこなのだ！？弱い物いじめをする奴は鈴々がぶっ飛ばすのだ
！」

「お待ち下さい桃香さま。あの商人、ただの商人ではありません
！」

え？どういうこと？わたしは解らず、首を傾けた。

「どういうこと？愛紗ちゃん？」

「はい。あの者はかなりの武を持っております。この人数の賊な
ど直ぐに片付くでしょう。」

愛紗ちゃんがそう言ったので、商人さんの方を見ると、賊の人た
ちが一斉に商人さんに向かって行った。

そこからは驚きの連続だった。商人さんは、荷台に乗せた武器は
使わず、素手で相手を倒している。

賊の人たちはあっという間に倒されて逃げて行った。それよりも
わたしは、

かぶり物をしているから顔は見えないけど、確かに見えた、動き
と共に服がめくれて、

時折見せる背中の龍が・・・間違い無い！あの人、予言に出てた龍の化身さんだと。

く烈火く

ふゝ。なんとか殺さずに全員逃げに行ったぞ。それよりも・・・

「おい！そこに居る三人そろそろ出てこい！」

俺は、賊との戦いをずっと見ていた者達に言った。出て来たのは桃色の髪をした女と、

赤い髪をし、身の丈の倍以上もする得物を持った女の子と、俺と同じ壱月刀を持った、黒い髪の

『ズキン！』女がいた。何故頭痛？黒髪をした女を見たら頭痛がした。

「凄いですね。いつから気づいてたんですか？」

桃色の髪をした女が言ってきた。頭痛も一回きりでもう無い。

「最初からだよ。賊に囲まれたあたりかな。所で君達は誰だい？」

俺は三人に問いた。

「あつ申し遅れました。わたしは劉備、字は玄德といいます。」

「鈴々は張飛なのだ！よろしくなのだ！」

「うむ、我が名は関羽、字は雲長と申す。それよりそなたの顔を伺ってもよろしいですか？」

俺としたことが忘れていた。かぶり物を被っていたらいけないな。

「失礼。俺の名は趙昂、字は天龍。訳あつて旅をしている。よろしく。」

そう言い、俺はかぶり物を脱ぎ、三人に顔を見せた。

ん？関羽の様子がおかしい。下を向いて震えている。どうしたんだ？

「おい関羽。どうした」「烈火あぁっ！」「んだ！？」

そう言いながら関羽が俺に抱きついて来た。

えっ！？

19話（後書き）

蜀の三人がようやく出ました！

ここまでくるのが長かった・・・

感想お待ちしてます！

20話（前書き）

今回もがんばります！

20話

「烈火ああっ!!」

そう言いながら俺に飛び込んで来た関羽。何故俺の真名を知っている？

不思議な事に、関羽とは初めて会った気がしない・・・それに、懐かしい感じがする・・・

故に真名を呼ばれても嫌な気がしない、むしろ呼ばれていたい。

だが俺は関羽の真名を知らない。いや、忘れているんだと思う。

関羽は記憶を無くす前の俺を知っている・・・なら夢に出てきていた『愛』と言う人物なのか？

だがその確信も持てない。関羽は俺の胸の中で泣いているようだ。

「生きていたんだ・・・私が村を離れている間に村人の虐殺・・・

・村の壊滅。

久し振りに戻って来てみれば豊かだった村が何処にも無くお前の姿も無かった。」

つまり関羽も俺と同じ村の出身なのか。良かったな生き残りがいて・・・

俺はそう思いながらも身動きが取れないのでそろそろキツイ。

「関羽そろそろどいてくれないかな？ 苦しい・・・」

関羽は俺に思いっきり抱きつかれて泣いているので息が苦しくなった。

「あつ・・・すまない。烈火。それより何故私の事を真名で呼んでくれない？」

「呼んでくれないと言ってもすまないが君の事も村の事も覚えていないんだ。」

俺は関羽に何も覚えていない事を伝えた。かなり辛い物が駆け巡る。

「えっ……？何も覚えていないとはどういう事だ！」

関羽が声を荒げて俺に迫ってくる。

「なら……幼少の時に私と交わした約束も覚えていないというのか！？」

幼少の約束……？あの時折夢に見るあの光景か？するとやはり『愛』と言う

人物は関羽で間違いないのか？俺はあの夢を思い出すように意識した。

だが女の子の顔には霞みが掛かっていて見ることはできない。

「お前は、言ったはずだ！私を超え、大陸一の武人になると言っただけだ！」

関羽のその言葉で霞みの掛ったその記憶が晴れて行く。間違いない。

あの子は関羽そして真名は愛紗。俺はこの子の事を俺は愛ちゃんと呼んでいた。少しずつ蘇る俺の記憶。

確かに思い出した。まだ記憶の一部分にすぎない・・・愛紗には申し訳ないが、

この事をまだ言うべきではない。愛紗に言うのは全て思い出した時だ。

「すまない・・・解らないんだ・・・」

俺の言葉で愛紗は俺を掴んでいた手を離し、その場に力無く座り込んだ。

「あのおうちよつと良いですか？趙昂さんの事詳しく教えてくれませんか？」

俺達のやりとりが終わったのを見計らい、劉備が話に入ってきた。

ちょうど話そうとしていたから話しておこう。

「さっきの関羽との話で解っていると思うが、俺には十歳位からの記憶が何故か無い。」

確かに聞く話しでは関羽と同じ村の出身のようだが、記憶が無いおかげでそれも解らない。

だから俺は自分の記憶を取り戻す為にこうして商人をしながら旅をしている訳だ。……」

俺は大体の俺の状況を三人に説明した。龍の化身という事は言っていない。

「そうなんだ・・・趙昂さんも大変なんだね・・・」

「記憶が無いなんて大変なのだ・・・。」

劉備と張飛は心配な面持ちで俺を見ている。そこまで気にしないでいいのに・・・

「その時はちょうどあの村が壊滅した時と同時期・・・やはり烈火・・・いや趙昂殿は

その村の事件に巻き込まれ、何かしらの理由で記憶を失ったというわけか・・・」

愛紗は拳を握り絞め悔しそうにしている。

やはり愛紗は同じ村の出身だから自分の故郷が無くなっている事で俺と思つ気持ちは一緒か・・・。

「でも趙昂さん。何であんなに強いのに商人なんてしてるんですか？」

「そうなのだ！賊をすぐに倒しちゃうのに商人なんてもったいないのだ！」

劉備と張飛は二人して商人はもったいないと言っているがこれには訳がある。

「商人をしているのはある理由が在るからだ。俺の記憶に関係していないようなある人物を探しているんだ。」

商人ならそういう噂などが直ぐに手に入るだろ？

でもな、いくら調べても手掛かりの一つも見つからない。ただそいつは近いうちに

必ず現れると思うからね。それまでどこかに武官しようと考えてるんだ。」

どこかに武官でもしよう。俺は今自分の考えてる事を三人に言った。

何故か三人は嬉しそうな顔をして俺を見ている。

「だったらわたし達の仲間なって下さい！この世の中は今、かなり辛い状況になっています。

民達の笑顔が無くなる世の中なんて見たくありません！今まで三人でがんばってきたけど

もう限界が来ています。だから龍の化身である趙昂さん力を貸してください！」

「鈴々からもお願いするのだ！趙昂のお兄ちゃん鈴々達と一緒に居て欲しいのだ！」

「趙昂殿私からもお願いします。」

三人から期待の眼差しが俺に刺さってくる。三人の考えは俺と同じか・・・三人の目は本気だ・・・てか龍の化身だってもうばれてるよ・・・

「劉備に聞きたい、何故俺が龍の化身だとわかった？」

俺は三人がいつそれを知ったのか気になった。

「え？さっき賊と戦ってる時にチラチラ見えてましたよ！？」

やっぱりその時が・・・まあいいや。この子達と俺の目指す物は一緒みたいだな。

「いいぞ！俺でよかつたらいくらでも力になる。これからよろしくな！」

「いいんですか？やったー！！」

劉備がはしゃいでいる。そんなに嬉しいのかな？

「ところで今からどうするんだ？」

俺は今後の方針を三人に聞いた。ここでは良く話せないしな。ついでに腹減ったし。

「まだ決めてませんよ。」

劉備さん・・・計画無しですか？自信満々に答えられても困りますよ・・・

「まあ腹もすいたし、この先の街にでも行って飯食いながら今後を決めるか。」

俺はそう提案しみんなが納得したのを確認し、この先の街へと向かった。

後ろのほうで『二日ぶりのご飯だー』と聞こえたのは空耳だと信じたい・・・

20話（後書き）

なんか長い気がする・・・烈火は蜀の三人と行動を共にしていきます。

感想お待ちしてます！

21話（前書き）

こんばんわ！

お盆で太ってきているボーズです。

ではどうぞ。

21話

幽州という街に着いた俺達四人は、今後の事も踏まえてとある飯店で食事をしていた。

「ところで趙昂さんは、何の商人をしてるんですか？」

劉備が俺が売っている物が気になっていたのか聞いてきた。別に隠す事じゃないしな。

「メンマだけど。知ってるか？丸天印の壺メンマを？」

俺は自分が作り出したメンマをメンマの極みだと自負している。それを軽く自慢げに言った。

今までの街や村に行けば噂になっているほどである。

一時期は本気で武人を辞めようかという一時の気の迷いをしたこともあった。

「えっ！？ 天印の壺メンマはこの辺りや、私達が旅してきた村

ではかなり有名でしたよ！」

「確かにそのメンマの話は良く聞きます。何とも『このメンマを食べると他のメンマを

食べれなくなるほど美味しい！』と食べた民が言っほどとお聞きしています。」

「そうなのだ！だからいつか食べてみたいってみんなで言ったのだ！」

劉備、関羽、張飛は凄い剣幕で言っている。張飛ちゃん・・・食べ物がかってま

俺は話を聞く限りではこのメンマを食べた事がないと言っている。

まあ売れば直ぐに完売してたからな。やっぱり凄いなこのメンマ・・・

「という事は三人共このメンマを食べた事ないのか？」

「はい・・・一度も食べておりません。」

「私達が行く頃にはもう在庫が無い時ばかりで・・・」

「だからメンマを売っている人を見つけたら食べさせてもらおう
と思つてたのだ！」

この三人はそんなにこのメンマを食べたかったのか？あと張飛。
欲望が出ていますよ・・・

「よほど食いたかったのか？なら食うか？」

そう言い、俺は懷に入れている酒の肴用の壺メンマを取りだした。

取りだした瞬間三人の目が獲物を狩るような眼をした事は忘れな
い・・・

「これがあの幻のメンマ・・・」

「とうとう私達が食べれる時が来たんだね！」

「早くたべるのだ〜！」

三人ともそんなに神々しくメンマを見るなよ・・・

「「「いただきます！」」」

三人は一斉にメンマを口に運んだ。さてさてどんな感想を言ってくれるのやら。

俺はメンマを噛みしめ、呑みこむ三人を観察していた。

食べた三人は呑みこむと急に震えだした。

「「「うまいっ！！」」のだー！！」

その言葉と同時にどんどん無くなる壺メンマ。こんなに食べてくれるなんて星以来だな・・・

そういえば星は今頃なにしてるだろうか・・・母上も父上も元気かなあ・・・

俺は急に妹や家族の事を思い出した。特に星は今何をしているのかかなり気になる。

そう言えば何か忘れてる・・・そうだ！今後の方針だ！メンマの話題になってちゃいけないだろ！

「そう言えば今からどうするんだ？」

メンマに夢中の三人にこれからを聞いてみた。それを聞かないと話にならないぞ。

「これからですか？まず義勇兵になり太守の兵として参加するのはどうですか？」

愛紗がそう答えた。あとの二人は今だにメンマに夢中です。

「義勇兵か・・・悪くないな。それで行こう！」

俺は愛紗の意見に賛成し、これから義勇兵として何処か募集してないか聞きに行くため食事を終わらせた。

「さあ腹もいっぱいになったし、そろそろ行くぞ！御馳走様！」

俺がそう言つと急に三人の顔色が曇る。いったいどうしたんだ？
なかなか言いだせないようだ。

「えゝつと・・・趙昂さん商人さんだからお金沢山持つてと思
つて・・・」

「鈴々達は二日ぶりのご飯だったのだ・・・」

ん？つまりこの方々はお金を持っていないというので？俺に全額
払わせるつもりなの？

それにしてみんな容赦なかったよね・・・特に張飛！

「つまり三人共お金を持ってないと？」

「面目ない・・・」

関羽がとてつもなく申し訳なさそうに頭を下げる。

まあいいさ。今まで稼いだお金が在るからな。

それにこれからは武を基本に置いていくから商人はもう終わりだし、これから旅をしていく

仲だしな、ここは面倒みてやろう。

会計を終えた俺達は店の女将からこの幽州の太守、公孫贇が義勇兵を募集していると聞き、

まずはそこに向かうという事で決まった。その時、俺達の話しを聞いていた女将が、

この酒と壺メンマを交換して欲しいと言ってきた。特に嫌な交渉では無かったので快く交換した。

公孫贇の所へ向かう途中、見事に綺麗な桃園を見つけた俺達はそこでこれから結束した

姉妹として誓いを立てようと言う事で四杯の杯を天に掲げた。

「我等四人！」

「性は違えども、姉妹の契りを結びしからは！」

「心を同じく助け合い、みんなで力無き人々を救うのだ！」

「同年、同月、同日に生まれる事を得ずとも！」

「願わくは、同年、同月、同日に死せん事を！」

「民との幸せを願わん！」

「『『『乾杯！』『』『』』」

こうして俺達は、この乱世に身を投じた。

21話（後書き）

ようやく桃園の誓いまでできました！

最後の文は自分で考えました。

感想お待ちしています！

22話

桃園での義姉妹の誓いをした俺達は、公孫賛のいる城へ向かうとしていた。

「ちょっと待つのだ!!」

張飛が出発しようとしていた俺達を呼びとめた。

「どうした？鈴々？まだ食い足りないのか？城に着くまで我慢しろ。」

愛紗があきれながら張飛に言っているようだ。だが張飛の様子はおかしい。

「そんな事はどうでもいいのだ！せつかく鈴々達は姉妹の契りをしたのに、」

趙昂のお兄ちゃんの真名を預かってないのだ！これからずっと一緒に不公平なのだ!!」

「あつ！確かに鈴々ちゃんの言う通りだね。真名も預け合って無いのに姉妹とか出来ないもんね。」

そう言えばそうだな。契りを交わした仲だからな。真名も預けるのが常識だよな。よし！

「すまない。正式に名乗ろう。我が名は趙昂。字は天龍。真名は烈火だ。

記憶を戻すと我が使命、乱世の終結を目指し旅をしている。これからよろしくな！」

「私は劉備、字は玄德。真名は桃香。烈火さんよろしく願います。」

「鈴々は張飛、字は翼徳。真名は鈴々なのだ！烈火お兄ちゃんよろしくなのだ！」

「我が名は関羽、字は雲長。真名は愛紗。烈火の記憶が戻るまで、私は趙昂と呼ぶからな。」

三人の真名を預かり俺達は本当の義兄弟（姉妹）となった。

「すまない愛紗・・・記憶が戻るまで俺も関羽と呼ばせてもらおう。必ず思い出させるから」

それまで待っていてくれ！」

俺は関羽の手を握り締め固く誓った。

ん？何やら関羽の顔が偉く赤いがどうしたんだ？

「おい関羽。熱でもあるのか？顔が赤いぞ？」

「べつ別に熱などはない！そんな事よりも早く公孫賛の城に行くぞ！」

関羽が速足で進み出したので慌てて追いかける三人。

「えへへ。愛紗ちゃん照れちゃって。可愛い！」

横で桃香が何かを言っているようだが何の事が解らない。女
って解らないな。

関羽に追いついた時にはもう城の前まで来ていた。

「桃香様、どうやら公孫贄の城はこのようですね。」

関羽が桃香に確認を取っているようだが桃香は聞いていないようだ。

何か考えているような感じがしている。

「どうしたんだ桃香？」

さつきからぶつぶつと独り言を言っている桃香に我慢できず、俺は思わず聞いてしまった。

「公孫贄・・・公孫・・・贄・・・あつ！！思い出した！公孫贄ってどこかで聞いた事

があるって思ってたら白蓮ちゃんの事だよ！小さい時に私塾で一緒に勉強してたんだ。」

知り合いか。なら話しも直ぐに終わりそうだな。それにしても忘れる位の人なんて

可哀想だな・・・この太守は存在感無いのか？

「じゃあ桃香。門番に取り次ぎを頼むように言って来てくれ。」

「了解！行つて来るね！」

そう言いながら桃香は門番の兵士の所に向かった。

兵士からしばらく待つように言われて俺達はしばらく待ち、戻つて来た兵士から中に入るよう

言われ、城の中に入った。

「おゝ桃香久しぶりだな！元気にしてたか？」

「きゃー！白蓮ちゃんも久しぶりだね。まさか太守になるなんて凄いねー！」

二人は昔の話で盛り上がっているようだ。このままだと更に話に火がつきそうだ。

そろそろ止めておかないと。

「公孫贊殿。積もる話もあるでしょうが私達が来た理由も聞いてくれませんか？」

俺は二人の話を中断させ、こちらに意識を向いてもらった。

「すまない。あまりにも懐かしくてつい話しこんでしまった。要件はなんだ？」

ようやく話の本題にいける・・・

「白蓮ちゃんの所は義勇兵を募っていたでしょう？その話を聞いて私達は義勇兵になりに来たの。」

桃香がここに来た理由を必死に説明している。

「おー！ありがたい！今は一人でも兵が欲しかったんだ。今はうちにいる将達は

遠征に出ているからなそいつらが帰ってきたら詳しい話を聞こうじゃないか！

長旅で疲れているだろう？ゆっくりしていつてくれ！」

こうして俺達は公孫贇の所でしばらく世話になる事になった。

今出て行っている将はどんな人達なんだろうと思いつつながら、俺達は部屋から出て行った。

22話（後書き）

ご主人様なんて言わせないよ！

いよいよ次に待っていた人物の登場です。

感想お待ちします！

23話(前書き)

メンマを食べたい！

でわどづぞー！

23話

公孫賛の所にやって来て3日がたった俺達。桃香の旧友という事もあり、

城の周辺も自由に動いていた。信頼されてるんだな。

俺は暇を潰す為に、近くの飯店で働いていた。主に仕込み中心で。

〈関羽side〉

私達は、公孫賛殿から話があると言う事で玉座まで来ていた。

「わざわざ集まってもらってすまないな。ここに来てもらったのは桃香達がここに来た

理由を詳しく知りたいからだ。桃香話してくれ。」

「えつとね。私達は今まで三人で村を渡りながら困った人達を助けてたの。」

でも三人だけじゃ助けられる所も限られてくるでしょ？だから大きな部隊に

入って今までより多くの民を救いたいと思って白蓮ちゃんの所に来たの。」

桃香様が私達がしてきた事を事細かに話している。それにしても趙昂は何処行つたのだ？

確か昼には戻ると言っていたが、とつくに過ぎているぞ？

公孫賛殿は気にしていないようだが・・・

「よく解つた！桃香の実力はある程度解るが後ろの二人はどれほどなのか・・・」

失礼なっ！私と鈴々の武は一騎当千の物だぞ！

「おや？伯珪どの。見た目で相手の強さを見極めねば、更に上へはいけませぬぞ？」

そうであるう？黒髪の者。」

私が少し頭に来ている時、ふと現れたのは見た事無い人物だった。
こいつ強い……

「おお！星帰っていたのか！予定より早かったな。みんなに自己紹介をしてくれ。」

「私は趙雲 字は子龍と申す。伯珪殿の所で客将をしている。」

ふむ。この者……やはりかなりの武の使い手だ。何やら小さい趙昂と対峙しているようだ……

「そう言えばお兄ちゃんはどうしたのだ？」

ようやく鈴々が趙昂が居ない事に気付いた。

「ん？もう一人いるのか？その者はどこにいる？」

趙雲が趙昂の事を探している。あやつは本当に何処にいったのだ？

「公孫賛殿、そういえば趙昂は何処に行っているのか知っているか？」

私は何も言わず何処かに行った趙昂の行方を公孫賛殿に聞いた。

「ああ。あいつなら「すまぬ。今何と言った？」この…？」

公孫賛が答えようとしている途中で、趙雲が割って入ってきた。それにかんりの剣幕で問いただして来る。

「趙昂の事か？」

私は凄い剣幕で迫る趙雲に押されながら答えた。

さっきまでの穏やかな感じが全く消えている。趙昂と知り合いなのか？

「趙昂なら城の近くの飯店で働いているぞ。何か働きたいと言っ
てな…って星どこに行く？」

公孫賛殿の話の途中で部屋を出て行こうとする趙雲。その時。

「ただいまー！」

趙昂が帰ってきた。趙雲が部屋を出ようとしたと同時に開かれた扉は勢い付いた趙雲を止める事が出来ない。つまり…

ゴッソっ！

二人は凄い勢いで衝突したのだ。あれは痛いな…

私は倒れた二人に合掌した。

「痛ってー！一体誰だよ……あ！」

「すまぬ！私は先を急いでいるのだ。でわ……あ！」

見つめ合う二人。私の中で嫌な物が駆け巡る。この二人は何なんだ？趙昂が一人で旅をしていた時の知り合いなのか？

「兄上!」「星!」

趙雲が趙昂に飛び付き、まるで子供のように泣いている。

ん? 趙昂には兄弟は居ないはずだ。何故趙雲は兄と読んでいるのだ? そもそも趙昂もこの名は本当の名では無い。記憶が無くなった時に何か合ったのだな。

と私は思いながら二人を見ていた。

23話（後書き）

追加しました！

24話(前書き)

お久しぶりです！

ではござい！

24話

（烈火）

「兄上ー！！会いたかったですぞおお！！」

と言いながら、抱きついて来る星。

一年ほど会っていなかったからな、えらく懐かしいな。

「星。久し振りだな！ちょっと見ないうちに大きくなって。お前も旅に出たのか？」

何爺くさい事言っただ俺は？まあ会いたかったからな。兄ちゃん嬉しいぞ！

「なんだ星？趙昂とは知り合いなのか？」

公孫贇が俺達の間係を聞いてくる。こいつ俺達のやりとり聞いてなかったのか？

「ん？伯珪殿。私達の会話を聞いておられなかったのですかな？」

星が俺が思っていた事を言ってくれた。出来た妹だよお前は。

「公孫賛、星は俺の妹だよ。」

「おお！ならお前が星が言っていた、兄か！色々聞いているぞ！」

色々だと？星は俺の事を公孫賛に何て言っているんだ？気になる・

「星・・・お前は俺の事を何て言ってるんだ？」

「はて？ありのままに伝えているだけですよ。私の大切な兄上だと。」

はぐらかしたなコイツ・・・まあいいや。

「所で今は何の話をしてたんだ？」

俺が居ない間に何やら話をしていたようだし。桃香達もこれからの事を話しているだろう。

「えっと、ここに來た理由まで話したよ。」

桃香が俺の居なかった時の事を話してくれた。

そこまで話してるのか。なら話しが早いな。

「まあ桃香が話している通りだ。俺達を雇ってくれるか？」

「・・・ああ、桃香の実力は知っている。他の二人も星が認めている位だ。」

趙昂の力は解らないが、星の兄だから実力はかなりの物を持っているだろう。

前も言ったが、今は少しでも兵が欲しい。私に力を貸してくれ！」

こうして俺達は正式に公孫贇の兵（客将）としてお世話になる事になった。

「うん！私たくさん頑張っちゃうもんね」

桃香が張り切って胸を張っている。これ位気合いが入っているなら心配ないな。

「関羽殿も張飛殿もよろしく頼むぞ。」

「ああ！我が力とくにご覧じろ。」

「鈴々に任せるのだ！」

星も関羽も鈴々も挨拶を済ませたみたいだな。

「兄上。兄上のあの武が久し振りに見れると思うとは・・・期待してまずぞ。」

星からの激励も受けたからな。民の平和を思っで頑張るか！

こうして六人の気合いも入り、陣営が決まるまで、この先の戦いに備えた。

24話（後書き）

どうも！

最近なかなか進みません・・・

誰か文才をください！

感想お待ちしてます！

25話（前書き）

パソコンが雨に濡れてしまいました・・・

恋姫のソフトが出来なくなった・・・

どうしよう・・・

25話

公孫贇の正式な客将になり更に数日が経った。

そしてとうとう賊の討伐の任が来た。公孫贇の兵に呼ばれた俺達は武装をし、城門に向かった。

城門まで来ると既に公孫贇の兵達が整列していた。ざっと5000位か？

「すっごーい！この兵隊さん達は全部白蓮ちゃんの兵隊さんなの？」

桃香が綺麗に整列した兵に興奮しながら公孫贇に聞いている。

「そうだ！と言いたい所だが、残念な事に、正規の兵は半分ほどだあとは義勇兵なんだ。」

ほほう。だがここまで義勇兵が集まるのは公孫贇の力量だな。流石だ。

「義勇兵が集まるのもこの世の中が苦しい状況だと言つ事。この世はどうなつて行くのか・・・」

関羽の顔が少し暗くなる。

「これほど民自身もこの世を変えて行きたいと思っているのである。ろくな。」

民の為にこの世を間違つた方向には行かせはしないさ。」

星もこの状況で感じるものがあるようだ。そう言つた星の目には真剣な光が見える。

「ほう・・・趙雲殿もそう思われるか。その思いに感銘を受けた。共に闘う仲だ、

我が真名を受け取ってもらいたい。」

「愛紗が預けるなら鈴々も預けるのだ！」

どうやら関羽と鈴々が星と真名を交換するようだ。

「我が名は関羽、字は雲長。真名は愛紗。この真名を預けたい。」

「鈴々は張飛、字は翼徳。真名は鈴々なのだ！」

「我が名は趙雲、字は子龍。真名は星と言う。我が兄、趙昂の妹。この真名そなた達に預けたい。」

三人とも真名を預け合いこの戦いに更に気合いが入っているようだ。

「共にこの乱世を治めよう！」

「「ああ！」なのだ！」

三人が手を合わさり、それを見た桃香があわてて手を乗せる。

「あつ！烈火さんも早く！」

桃香が俺も乗せるようにせかしてくる。

「兄上も早く。これから戦う仲なのですぞ？」

みんな良い顔で俺を見て来る。不思議だな・・・こいつ等といると
今からの戦いにも

負ける気がしない。俺は良い仲間巡り合えたな。

そして俺は手を四人の手の上に乗せた。

「ああ。共に民との平和を。」

「」「」「」
「応!!!」「」「」

こうして五人の絆はまた深い物になった。・・・何か忘れている
ような・・・

俺がそんな事を思っていると、隅の方で小さくなっている公孫賛
を見つけた。

「いいんだ・・・どうせ私は昔から影が薄いと言われているんだ・
・」

別に忘れられる事なんて慣れているさ・・・」

小さくなっている公孫贇が何やら拗ねているようだった。

「すまない。公孫贇！拗ねてないでお前も一緒に頑張ろうな！な
！」

俺は拗ねている公孫贇を必死に慰めていた。

「拗ねてないもん！！私は拗ねてなんかないんだもん！！」

公孫贇が訳のわからない事を言い出した。

公孫贇が何か言っている内に布陣が決まり、とうとう戦が始まる。

「趙昂！我々は左翼を任された。新参者に任せるとは、桃香様が
信頼されている証拠。」

伯珪殿もなかなか豪快だな！」

「俺達が信頼されている証拠だよ。」

俺はいきなりの左翼でかなり驚いていた。

「皆の物よく聞けい！」

公孫賛の演説が響く。

「諸君！いよいよ出陣の時が来た！幾度もやって来る賊共を今日こそ殲滅してくれよう！」

公孫賛の声が響く。兵士たちの士気も上がっている。

「行くぞ！我が勇者達よ！明日の平和の為に手柄を立てよ！」

「「「うおおお！……！」」」

大地を揺るがすような声の波、これが軍隊。俺達の士気も上がって行く。

「出陣だ！！」

号令と共に、次々と城門から出る兵士達。

こうして俺達の初陣が始まった。

25話（後書き）

どうも！いよいよ初陣できました！

感想お待ちします！

26話（前書き）

お久しぶりです！パソコンも無事復活し、恋姫も出来るようになり
ました！

ではどうぞ！

26話

公孫賛の所に客将になつての初めての出陣。現在俺達は敵の賊の砦に進軍中だ。

今から戦だと言つのにどうも締まらない。原因は間違い無くさつきから俺の腕を離さない星だ。

「兄上が居なかった家はとてつもなく寂しかったですぞ！」

そう言いながら俺の腕を絞めつける。こんな事されたら柔らかい感触が伝わってくる。

（星は妹だ！意識をするな俺！）

心の中でそう呟きながら星の話を聞いている。

「星！そろそろ離れろ！趙昂が困るだろう！いくら妹でも限度があるぞ！」

関羽が助けてくれそうだ。いいぞ関羽！そのまま星の意識を逸ら

してくれ。

「なんだ愛紗。そんなにこれが羨ましいのか？ 久し振りに会ったのだ。甘える位よからう。」

ほれ。愛紗もこのようにしたいのであろう？ ほれほれ。」

そう言いながら更に絞めつける。だから当てるな！

「え？ 愛紗ちゃん何時趙雲さんと真名を預けたの？」

俺が煩惱という敵との戦をしている時、桃香が聞いてきた。

「はい。先ほどの城を出る時に、星の心に同感して真名を預けました。」

「鈴々も一緒に預けたのだ！」

桃香だけ真名を預けてないのか。あの時一緒にいたよな？ 聞いてなかったのか？

「二人ともずるい！ 趙雲さん。私の真名も預かってもらえないで

しょうか？」

「いいですぞ劉備殿。我が真名は星。兄上の旅の共は私の友。この真名預けたい。」

「ありがとう！私の真名は桃香だよ。星ちゃんよろしくね！」

これで全員真名を交換し終え。いよいよ賊の砦に到着した。

ここから気合いいれないと。初めての軍での戦だからな。俺はそう思いながら砦を見つめる。

俺達が来ている事に気付いた賊も戦闘準備に取り掛かっている。

「これより我が村近辺を脅かす賊共を退治する！全軍突撃いいいい！！！」

公孫賛の号令と共に兵が突っ込んで行く。俺達も一斉に突っ込み、敵とぶつかる。

近くにいる敵を容赦なく斬り伏せる我が兵士。いくら敵でもやはり人が人を斬る事は良く思わない。

そう思いながらも向かってきた敵を斬り伏せる俺・・・この矛盾がどうにもならない。

かなりの数を斬った俺にある異変が起きた。

《どうだ？人を斬るのが楽しいだろう？

突然頭の中から聞こえてくる声。斬るのが楽しいだと？そんな事思っ
てなどいない！

《いいや嘘だね。俺には聞こえてるぜ？お前が血を望んでいる事を。
を。

うるさい！俺は血なんか望んでいない！消えろ！

俺は頭の中から聞こえてくる声に向かって思いっきり叫んだ。

《ヒヒヒっ今はそういう事にしといてやる！また来るぜ相棒！

そう言い残し、頭の中の声は消えた。

あいつは一体なんだ？俺の事を相棒と言った。一体何なんだ・・・？

「「「うおおおおおおお！！！」」」

俺が考えていると同時に俺達の軍の勝鬨が木霊した。賊の軍が壊滅したようだ。

こうして俺達の初陣は勝利で飾る事ができた。今は公孫賛の城に向けて帰路をしている。

「やったね 初めての戦に勝てて」

桃香が喜んでいる。周りにいる関羽も鈴々も星も公孫賛も兵のみんなも賊の脅威に

怯えずにいいと思うと自然に顔が緩むようだ。

ただ一人俺だけが険しい表情のままだ。

あの頭の中で語りかけて来た奴は俺の何なんだ・・・？

俺はこんな事を思いながら公孫贇の城に帰った。

26話（後書き）

久しぶりの投稿で文が変かもしれないですが

感想お待ちしております！

27話

初陣からの俺達は、度々ある出陣でも勝利をおさめていた。

関羽や鈴々、星は度重なる戦でその名を有名な物にしていた。

俺はと言うと、最初の戦でのあの声により、多くの敵を相手するのが怖くなっていた。

だが、いくら最低限の戦闘をしてもあの声は戦場になれば必ず聞こえてくる。

それは戦の度に多く俺に語りかけるようになった。

いくら止めると言っても、《血を浴びたいんだろう?》《人を斬る感覚はたまらない物だろう?》

など俺の心を貪るように語りかけている。

それでも俺は今まで戦場に出ているのはやはり仲間達がいるからだ。

だが、日々多くなっているこの声でとうとう俺は戦に出れなくな
った。

心配している仲間には風邪をこじらせたと言い、あまり心配させ
ないようにしたい。

しばらく休んでいると聞こえて来ていた声も聞こえなくなり、大
丈夫な状態になれた。

ちょうどその時、最近各地で暴れているという黄布党の討伐命令
が朝廷からくだった。

「みんな聞いてくれ！わが幽州にも朝廷から黄布党の討伐命が来
た。最近の奴らの行動は

目に余る。我々幽州の兵も黄布党討伐の命に従い、黄布党を討
とうじゃないか！」

軍議の場所で公孫賛が俺達に朝廷から来た文を読み上げ、黄布党
討伐に参加するよう呼びかけた。

「うむ。最近の奴らの行動は民を苦しめる悪行ばかり。放っては
おけない・・・」

「そうだよ！黄布党の人たちは村とかを襲っているって聞いているしね。」

「弱い人達を苦しめる人は鈴々が許さないのだっ！！」

三人はこの討伐にかなり気合いが入っているようだ。

「ではこれより二刻後に出発する！各自準備をしていてくれ！」

公孫贇の声と共に軍議は終了し、各自出陣の準備に入った。ただ一人俺だけは不安になっていた。

またあの声が聞こえてこないかの恐怖が頭を駆け巡る。みんなには大丈夫だと言っているのですが、

俺も武装し、城門まで急いだ。

城門の前についた俺達は軍をまとめていた。

しかし俺には部下はいない。精神的に少し崩れた俺に兵が付いていく事はなく、

俺は星の軍に入っている。だが扱いは将としての扱いになっている。

「これより出陣する！全軍前進！」

公孫賛の号令と共に進軍しようとしたその時、

「あ、あの、しゅしゅしゅみましえん！」

前方から二人の帽子を被った女の子が現れた。

「何だ？お前達は？一体何の用だ？我々は今から黄布党の討伐に向かう所だ。邪魔をするな！」

関羽が二人の女の子に向かって睨みながら追い払おうとしている。二人とも怯えているじゃないか。

「あの・・・わたし達も仲間に入れてもらえないでしょうか？」

今度はとんがった帽子を被った娘が怯えながらも聞いて来る。

「確かに気持ちはありがたい。だが見たところお前達は明らかに武をもっていないだろう？」

そんな者を仲間に入れても、無駄死にするだけだぞ？」

関羽がごもつともな返答をよこす。確かにこの娘達は武は期待できないだろう。

「はい・・・確かにわたし達は武力はありませんが、水鏡学院で学んだ知力があります。」

なに？水鏡塾だと？あそこはかなり有名な私塾じゃないか。そこ
の二人が俺達の仲間に

なりたいと言っているのは軍師のいない俺達には良い事じゃない
か。流石にあの二人ではないと

思うが・・・

「すまないが二人の名前を聞いていいか？」

このままでは話も進まないの俺は二人に名前を聞いた。

「あつ。私の名前は諸葛亮 字は孔明と言いしゅ。あわわ囁んじやいましゅた。また・・・」

何？あの伏龍だと女学院の中で一、二を争う者だぞ。

「わたしは名前が鳳統で、字が土元といいましゅ。あわわ・・・」

こっちは鳳雛だつて？女学院の最高の実力者が二人とも俺達の仲間になるなんてそんな事は

夢みたいだ。

ぜひともこの二人は軍師として働いて貰いたい。

「では諸葛亮殿と鳳統殿、何故我々の軍に入りたいのだ？」

関羽が皆を代表して二人に聞いている。

「はっはいっ！わたし達は水鏡先生の所で多くの勉強をしています。でも今、この国は腐敗していて民が苦しみ、何も出来ない人達が多く出ています。」

「その時、わたし達の思いと劉備さんの思いが一緒だと知り、わたし達は水鏡学院を飛び出して来ました。」

この二人は桃香の目指すものが一緒なんだな。そしてこの真っ直ぐな目、

そんな目をしている者を拒む事は出来ない。

「どうしようか？烈火さん？」

桃香が俺に聞いて来る。桃香の顔を見ると桃香も答えが決まっているみたいだな。

皆の顔も見ると同じみたいだ。決まりだな。

「諸葛亮と鳳統、俺達は君達を歓迎するよ。」

俺は二人に言った。

「やったね雛里ちゃん！」

「そうだね朱里ちゃん。」

二人は手を取り合い喜んでるようだ。

「私の真名は朱里と言います。よろしくお願いしましゅつ。あわわ・・・」

「私の真名は雛里でしゅ。あわわ・・・」

よく噛む二人だと思いながら俺はほのぼのとしていた。

こうして軍師が二人仲間となった。

27話（後書き）

感想お待ちしています

28話（前書き）

お久しぶりです！

でわどづぞー！

28話

俺達の軍に朱里と雛里の二人の軍師が加わり、黄布党の討伐へ向けて進軍中だ。

軍師の二人が真名を預けた時、俺達全員の真名も預けた。

「なあ朱里。黄布党の討伐だが何か策はあるのか？」

いくら軍師が加わったとはいえ、策の一つも考えていないなら話にならない。

俺は二人の策がどれほどの物か試したくなり、これからの討伐の策を聞いた。

「はい！あと四里ほどこいたら昔、川が干上がって出来た大きな谷があります。

そこに先行して出た愛紗さんの部隊が敵に追いつかれず、離さずの距離を保ちながら、

この谷まで引きつけてもらいます。そこで谷の両脇に構えてい

る、星さんと公孫贄さんの

部隊が弓を放ちます。そして逃げようと後退する敵を岩陰に潜んでいた鈴々ちゃんの部隊が

出てきて、愛紗さんの部隊と挟み撃ちにして敵を殲滅します。」

ほう。この短時間でこれほどの策が思いつくとは流石だな。俺は素直に感心していた。

ん？ちよつと待て。この策には俺は弓部隊か。まあ殺す事には変わりないが、

自分自身の武器で斬るよりはましだと思っていた。

「あつ！烈火さんには今から単騎で敵の情報ほ集めて欲しいと思っ
ています。」

俺が、弱気な事を思っていると、横から雛里が俺に単騎で敵の情報を集めて欲しいと言ひ出した。

「何故、単騎で行くんだ？情報収集ならもつと大人数で行けばいいじゃないか。」

俺はこの案に何故か納得できていなかった。それ故に、少し声を張り上げて、言ってしまう、

二人をすこし怯えさせてしまった。

「はい・・今からする策はあまり人を削りたくないんです。仮に大人数で行っても、

敵に見つかってしまったら元もこうもありません。さらに、自由に動けて、

武も長けている人は烈火さんしかいませんでした。」

なるほど、この策には俺の思っている事が全て駄目なのか。納得いった。

「さつき星さんから聞きましたが烈火さんは精神的な病から最近復帰したらしいので、

あえて戦闘要員としては、数に入れていません。」

「それなら仕方ない。なら俺は黄布党の事を調べてくるよ。」

俺はそう言い。単騎で行動に移った。

黄布党の事を探りに行く為、俺は単騎で行動していた。

ある程度行くと何やらこちらに向かって来る集団がいる。

目を凝らし良く見ると、全員身体の一部に黄色の布を巻いた。

それは間違い無く黄布党だった。しかしこいつ等が向かって行く所は桃香達が進んでいる

方向とは違う所だった。このままではマズイ。この集団が桃香達とぶつからないと、

朱里と雛里の策は失敗に終わる・・・

俺はこの事を皆に知らせようと走り出そうとした時、

「おい！その男！ここで何をしている？」

見つかった！

俺は黄布党に見つかってしまい、あっという間に囲まれてしまった。

「おい！兄ちゃん。ここで何してんだ？まさかどこかの軍じゃないだろうな？」

集団の先頭にいた男が俺に聞いて来る。

「だったらどうする？」

俺は少し威嚇しながら男に答える。

「くっ・・・！簡単な事よ。そうだったらこの場で死んでもらうさ。今俺の後ろに居るのは

三万の会員だ。それと各方向にも最低二万の会員が近くのを目指して出発している。

どっちにしたってお前は殺すがな！」

桃香達が進んでいる所にも奴らは向かっているのか。早く知らせないといけないな。

・
・
だがどうしても戦いは避けられそうにない・・・どうしたものか・

「どうした？あまりの数にビビったか？だがお前に用はないさつさと死ね！」

そう言い先頭にいた男は俺に向かって剣を振りおろしてきた。

俺はそれ avoidance、斬りかかって来た男の首を跳ね飛ばした。

しばらく出てこなかったあの声だまだ出てこないだろう。俺はそう思い更に近くにいた五人の

胸を半分にする。

一瞬何が起こったか解らない黄布党はしばらく呆けていたが直ぐに正気を取り戻し俺に向かってきた。

飛び散る首や手足、そこから出て来る血の雨、所詮は賊の集まり、
烏合の衆。

五千位は斬ったはずだ。だが減るような感じは全くない。どうし
ようもなく思っていたその時。

《ヒヒヒ、久し振りだな相棒。

聞きたく無い声が聞こえた。

《やっぱり斬る事は楽しいだろう？俺もお前越しに伝わって来る
んだぜ！

「うるさい！消えろ！」

俺は心の中に叫んだ。

《くくく。それは無理だな。

どういうことだ？ 俺はそっちに気が逸れてしまい、迫って来る斬撃に反応が遅れてしまい、

顔を斬られてしまった。

顔から血が噴き出す。それで出来た隙に敵が一斉に斬りかかって来る。

どれだけ斬られたか解らないがかなりの血を失っている。

《大丈夫か？相棒。まあこの数にここまで出来た事は大したものだ。お前はまだ弱い。

俺が戦いはどんな物で、お前の本能が望んでいる本物の殺しを教えてやろう。》

そう中の声が言うと同時に、俺の意識は自分の意思とは関係なく、

自分の中に入って行くような感じがした。

28話（後書き）

おそくなりました。

なんか文が変になっていますが、

感想お待ちしてます！

29話（前書き）

前の話が中途半端になってすみませんでした。

睡魔には勝てない物です・・・

でわどうぞ！

29話

）side 黄布党（

俺達は近辺の村まで食糧を調達をしに、約三万で向かった。

張角様達がお腹を空かせては、あの歌も聞けなくなるからな。

村に向かってしばらく進むとそこには一人の男がいた。

先頭の会員がそいつに斬りかかろうとしたら、周辺にいた同志も
ろとも首が飛んでいた。

そしてその男との戦闘が始まったのだが、いっこうに打ち取った
という話は無い。

むしろ、同志の首ばかりが飛んでいる。

飛び交う肉片、舞い散る血液。次々と同志の屍が積み上げられて
行く。

五千ほどの同志が肉片と化した時、男の動きが急に止まった。

その隙を逃すまいと次々と男に斬り掛りに行く。

かなりの出血量だが倒れる気配が無い。一人の同志が男に斬りかかるうとしたと同時に、

同志の首が飛んだ。男の様子がおかしい。

「ヒャーッハッハッハ！出れた、出れたぞ！これで人を斬れる！お前達・・・」

良い鳴き声を聞かせてくれよ！」

男がこの言葉を言ったと同時にそこには多くの同志達が血を撒きながら宙に舞っていた。

side 趙昂

『お前の本能が望んでいる本物の殺しを教えてやろう。』

声がそんな事を言ったと同時に意識が引きずり込まれた。

意識ははつきりとしている。見えている風景も一緒だ。ただ一つ違うのは、

身体が思い通りに動かない事だ。まるで別の何かが俺を動かしているような感覚だ。

その時、一人の黄布党が俺に斬りかかって来た。避けようと思うが全く身体が反応しない。

相手の剣が振り下ろされようとした時、その黄布党の男の首が跳ね上がった。

そう俺が斬ったのだ。自分の意識に反して・・・

「ヒャーッハッハッハ！出れた、出れたぞ！これで人を斬れる！お前達・・・

良い鳴き声を聞かせてくれよ！」

【俺】から発せられる言葉。その言葉を言った直後に動き出す身体。

真っ先に黄布党に向かって行く。そして残虐な殺戮が始まった。

「クツクツク・・・やはり人を斬る感触は快感だ。」

そう言いながら次々と黄布党を斬っていく身体。間違いない。今俺の身体を支配しているのは

あの声なのだと。

もうやめろ・・・やめてくれ・・・

いくら思っても一向に止まらず、人を斬っていく身体。

相手がいくら命乞いをしたり、逃げようとしても容赦なく命を奪って行く。

まるで殺す事に喜びを感じているように斬っていく。

これが俺の本能・・・殺す事に喜びを見出す獣・・・俺は自分自身に吐き気がした。

それから身体が止まったのは黄布党の者達が全て屍になった時だった。

三万の相手をたった一人で壊滅するほどの武力を誇った俺の身体。

「まだだ・・・まだ血が足りない・・・もっと！もっと人を斬らせろ！！」

あれほどの人を斬り殺しても足りないと言うもう一つの俺の意識。

黄布党の者達の血液が土にしみ込んで行く時に物陰から覗いていた人物が現れた。

「あつらーお久しぶりね趙昂ちゃん。いえ・・・今は中の趙昂ちゃんかしら？」

貂蟬が物陰から出て来たのだ。

29話（後書き）

また文が変だ・・・

感想おまちしときます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2175m/>

恋姫物語

2010年10月9日01時44分発行